

# ログ・ホライズン～見 敵決殺の冒険者～

創作のハサン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

\*ログ・ホライズン（結殺のハサン）を改名した作品です。

暗殺者、ハサン＝サツバーハ。オンラインゲーム”エルダー・テイル”でその名を語る  
1人の男にある日災いは降りかかる。

突然現実と化したゲームの世界。

彼は剣を手に取り歩き出す。

そしてその先にある、結末を目指し始めた。

# 目次

番外編	もしもサーヴァントになつたら	3殺目	P Kとの死合
番外編	カルデア生活その1	4殺目	目指すは遙か北
番外編	カルデア生活その2	5殺目	空駆ける三騎
番外編	カルデア生活その3	6殺目	パルムの深き場所にて
14		7殺目	
21	カルデア生活	8殺目	
1		9殺目	
36	28	10殺目	要という存在
1殺目	ハサンという男	弟子	ススキノ大脱出
2殺目	アカツキの想い	歪んだ世界	
110			
12殺目			
??????	彼の居ないアキバ		
116			

## 進展の第二章

110	11殺目	87	74	3殺目
96	彼の居ないアキバ	81	61	PKとの死合
87		74	53	目指すは遙か北
81		61	41	空駆ける三騎
103				パルムの深き場所にて
96				
87				
81				



# 番外編 もしもサー・ヴァントになつたら

「暗殺者<sup>アサシン</sup>、異世界より召喚に応じた。名前はまあ、カナメとでも呼んでくれるか?」

ステータス

筋力 A

耐久 C

俊敏 B

魔力 D

幸運 C

宝具 EX

設定

1. 身長／体重 : 172 cm · 58 kg?

出典 : ???

地域 : 日本（現代）?

属性 : 秩序 · 善

性別 : 男性?

「なんて事ない、私はただの冒険者さ」

2. 幼い頃に両親を失つて以降叔父の家系に育てられ、常人に比べて死に触れる機会

が多くのそういつた物事に對して考えが深く、それに伴うように常人離れをし始めていた霧ヶ峰 要の精神。そして叔父の影響で始めたオンラインゲーム”エルダー・テイル”内のアバター、ハサン＝サツバー＝ハの精神。その二つが謎の現象によつて交わつた事で完成したのが今のカナメという存在である。

### 3.『記録の地平線』

ランク：EX 種別：対軍宝具  
ログ・ホライズン。

彼の中に眠る仲間達への想いが形を成し軍勢を生み出す。そこが如何なる深遠であろうとも、どれだけ絶望的な状況であつても、カナメが願い続ける限り、仲間達との繋がりが途切れることなどあり得ない。

### 4. 気配遮断A+

自身の気配を断つ能力。カナメのそれは命の存在すらも薄め如何なる感知も意味を成さなくなる。

### 冒險者EX

冒險者である彼に与えられたスキル。皇帝特権に近い物で側にいる存在のスキルや技能を一時的に会得する事が出来る。但しランクは何段階かダウンする。

### 死神の信仰EX

死神を信仰している事で手にする事が出来るスキル。しかしEXとなるとその存在自体が信仰対象である事を意味する。彼の場合即死技で多くの魔物や悪人を屠つていた事から密かに信仰を獲得していくと思われる。

### レベルアップ

「やっぱり、レベルアップはいいな！」

### 霊基再臨

1. 「感覚が戻ってきた。今まで以上の活躍を見せよう」
2. 「力が戻ってきた。でも、まだまだ行けるぞ」
3. 「装備が新調されたな。身軽になつて戦いの幅も広がった。上手く使いこなしてくれよ?」

4. 「最終再臨、か。俺以外に優秀なサーヴァントなんて山ほど居るだろうに……。いや、此処までして貰つたんだ。礼は尽くそう」

### 開始

1. 「さて、戦闘開始だ！」
2. 「私が終わりを与えよう」

### スキル

「仲間達よ、ここに集え！歩き続けた記録の荒野、その果てを此処に開示しよう！」

ログ・ボックスの地平線!!

宝具

「これでどうだ！」

エクストラアタック

1. 「はつ！」

2. 「せい！」

3. 「ぜらあ！」

アタック

宝具カード

「フィナーレだ！」

「任せろ！」

「決まりだ！」

1. 「よし！」

コマンドカード

1. 「行くぞ！」

2. 「バフ乗せて殴る！」

## ダメージ

1. 「くつ！」
2. 「くそつ！」

## 戦闘不能

1. 「これもまた定めか……」
2. 「慣れってのは、怖いもの……だな」

## 勝利

1. 「ふう、勝てて良かった」
2. 「よし、素材を收拾しようか。持てるだけ持つて帰ろう」

## 会話

1. 「休息は適度なら良い物だが度を超すと良くない。少し出かけないか？」
2. 「私は冒険者、仲間達と横に並び歩み、進む者だ。だから上から目線は嫌いだし、かと言つて下から見上げられるのは苦手だ。対等な立場でありたいと思つてゐる」
3. 「マスターとサーヴァント、今回が初めての関係だけど、案外悪くないな」
4. 「あれが歴代のハサン……手合わせ願いたい所だ」（呪腕、静謐、百貌いすれか一騎以上所属）

5. 「あれが初代ハサン・サツバーハ、山の翁か？あの雰囲気、何処かで感じた事のある様な……？」（山の翁所属）

6. 「アルトリア、こんな所でまた共に肩を並べる事になるとは思いもしなかつた。まあ、向こうは私の事を知らないだろうけど……」（アルトリア・ペンドラゴン or 謎のヒロインX所属）

好きなこと

「好きな事？そりや、やつぱり冒険かな。新しい物の発見や強大な敵との戦闘、どれもワクワクものだ」

嫌いなこと

「嫌いな事？………悪は嫌いだ。理由のある悪はまだ許容出来る点も見つけられるけど、理由のない悪はダメだ」

聖杯について

「聖杯、願いを叶える願望機？私はいいよ、これ以上貰つてばかりじやバチが当たる。マスターの好きに使うと良い」

紹

L V. 1

「異世界召喚……か。また厄介な事に巻き込まれたもんだ。まあ、住まわせてもらう以

上役割は果たすけどな?」

L v. 2

「私は死神だ、それに歩み寄る死なんて通り名もある。無用心に近寄ると危険だぜ……なーんてな」

L v. 3

「死神と言つてもまあ、ただの肩書きだ。主人に剣を向けたりしないさ。もしもお前が悪に墮ちたら、分からぬけどな?」

L v. 4

「お前はあの人によく似てる。ポワポワしてる感じなのに自然と皆引き寄せられてしまう。懐かしいよ、全く」

L v. 5

「マスター、私にとつて人理焼却なんて見知らぬ他人の不幸くらい興味のない事だ。だがお前が望むなら、私は隣に立つていて。頼りにしてくれ」

イベント開催中

「何かあるみたいだ。冒険の時間だ、マスター」

誕生日

「誕生日おめでとう。めでたい事だ、祝おう」

# 番外編 カルデア生活その1

あらすじ

エルダー・テイルの世界に居たはずだった要は突然人理継続保障機関、カルデアのサー・ヴァントとして召喚されてしまった。帰る手段など発見されていない。頑張れカナメ、戦いはまだ始まつたばかりである！



「なあにこれえ？」

カナメは絶望し切つた顔で渡された予定表に目を通す。其処には練度上げの為の周回パーティが記されているのだが、その殆ど全てに自分の名前が記されている。

「ブラック企業なんてちやちなもんじゃねえぞこれ…………」

確認すればする程彼の名前がびっしりである。いくらサーヴァントと言えど限度と  
いう物があるのではと心配したくなるが、これもまた彼の定めである。  
「どれもこれもスキルの所為なんじゃ…………」

カナメは自分のステータスが表示されたタブレットを眺めながらそうボヤく。その画面は丁度スキル画面で停止していた。

### 冒険者EX

新たな発見を求める探求の旅を続けた冒険者に与えられるスキル。ランクが高い程あらゆる物事を瞬時に理解、把握、習得する事が可能。また、その際のランクダウンの幅も狭まる。

### 効果（コピー元：軍師の指揮）

- ・味方全体の攻撃力アップ+与ダメージプラス状態を付与（3ターン）
- ・味方全体のNPアップ（10%）

### 死神の信仰EX

死神の信仰によって手にする事が出来るスキル。EXとなるとその存在自体が信仰対象である事を意味する。

### 効果

- ・自身のNPアップ（30%）+攻撃力アップ（3ターン）
- ・相手全体に防御力ダウン+即死耐性低下を付与（3ターン）

## 世界の特異EX

世界における異物、それに該当する存在に付与される特殊スキル。その戦闘能力、影響力が高い程ランクが上昇する。

## 効果

- ・味方全体のNPアップ（20%）
- ・攻撃力アップ＋スター発生率アップ（3ターン）
- ・自身にタゲ集中付与（1ターン）

## 宝具：記録の地平線（アーツ宝具）

力ナメの内に秘めた仲間たちの想いを形にして召喚、敵全体を攻撃し仲間を鼓舞する。誰を呼ぶかによつて効果が少し変わる。

## 効果

- ・敵全体を超強力ダメージ
- ・味方全体の体力回復（1000強）+NPアップ（10%）
- ・味方全体にランダムバフを付与。（例：スキルターン減少、一回無敵効果付与など）

「普通に頭おかしい事しか書いてないな……」

全体強化スキルのオンパレード、はつきり言つて『〇〇が考えた最強のサーヴァント』に乗つてそうなレベルの異常性である。尚、此処までのNP上昇幅を誇るサーヴァントはそうそう居ない。お陰様で孔明やエレナ、マーリンらキャスター陣が漸くまともな休みを手に入れたのは秘密の話。

「こうなつたら直談判……は無理か」

はつきり言つてマスターに刃向かうことはしたくない。そうしたら彼を盲信する嘘つき焼き殺すガールと狂母が全力を持つてカナメを潰しに来る。カナメに言わせれば「別に殺してしまつても構わんのだろう?」なのだが、其処はやはりサーヴァント、マスターの命令には逆らえない。

コンコン

ドアを叩く音が部屋に響く。生憎ながら彼は今日誰とも約束を取り付けていない。誰だろうと疑問に思いつつも応答の為にドアに歩き寄り、鍵を開ける。

「あれ、孔明?」

そこに立っていたのは自前の論舌でカナメにハードワークを押し付けた諸葛孔明で

ある。彼がカナメの部屋に訪れる事はとても珍しい。何故なら、前述の押し付けが原因か、孔明らサポート役サーヴァントはカナメに対して罪悪感があり普段部屋を訪れない。彼の負担を増やさない為の配慮である。（カナメはそれに対して特に思う所は無い様子。それどころか孔明の論舌を褒めていた）

「済まない、少し匿つてくれ」

「へっ？まあ良いけど？」

カナメは訝然としながらも孔明を室内に招き入れドアに口籠をかける。そして冷蔵庫から赤い外套のアーチャーが作ってくれた茶を孔明に渡す。

「で、何があつたんだ？」

「実は……」

孔明は話し辛そうに口籠る。カナメは口籠る程言い辛い話の内容よりいつも堂々としている孔明が此処まで口籠る事に初見過ぎて目を丸くする。

「征服王が王様系サーヴァントを集めて宴を始めてな……」

「……………はっ？」

その何処に此処へ逃げ込む必要性があるのかカナメは問いただしたくなる。確かにギルガメツシユやオジマンディアス、イスカンダル、ネロ・クラウディウスは相手をするのが大変だろうが、アルトリア達騎士王達は其処まで厄介な事は無いはずだとカナメ

は考える。だがしかし、彼は前半4名が途轍もなく面倒な事を知らない。

「お前は最近来たばかりだから知らんと思うが、王という物は自分勝手な物だ！ それもあの金ピカや筋肉ダルマはそんじよそこらの奴等とは桁が違うんだ！」

「おつ……おう」

あまりの押しの強さに若干引き気味なカナメ。それでも邪険に扱わない辺り、やはりお人好しなのかもしれない。

「……ゲーム、するか？」

「……ああ」

カナメの申し出を素直に受ける孔明。2人は宴が終わるまでゲームを興じる事になつたのであつた。

尚、軍師と名高い孔明と冒險者EXで軍師の指揮を獲得したカナメの将棋勝負は予想以上に白熱し、マスターが食事の時間を伝えに来るまで延々と続いたという。

# 番外編 カルデア生活 その2

特異点F 炎上汚染都市 冬木

時はサーヴァントによつて火の海へと変えられし冬木。48人目的一般人マスター、  
藤丸立花アサシンとデミサーヴァント、マシユ・キリエライトの旅の始まり。

「暗殺者、異世界より召喚に応じた。名前はまあ、カナメとでも呼んでくれるか？」

彼らが呼び寄せたのは異界の使者、暗殺者を名乗る冒險者キチガイであつた。

「このタイミングで暗殺者だなんて……。此處はセイバーとか引くべきでしょ？」

「マシユ・キリエライトと言います。同じマスターのサーヴァントとして、よろしくお願  
いします」

「マスター？の藤丸立花です」

「ああ、よろしく頼む。マシユ、マスター藤丸立花」

その強さは凡百の英靈など足元にすら及ばず。

「私たち冒険者は如何なる敵エネミーも殺す。さあ、戦闘開始だ」

「あんた暗殺者でしょ!? 何で前線でバシバシ切りかかってるのよ!?」

「先輩達は私が守ります！」

「アサシン、マシユ！」

「ほおー、暗殺者ってのは陰気な奴が多いもんだが。テメエはそうでもないらしい  
そして始まる黒き騎士王との戦い。

「卑王鉄槌、極光は反転する。光を飲め、『約束された勝利の剣』！」

「宝具、展開します！」

「へつ、一筋縄じやいかねえか！」

「終告の刃——終わりだ！『夜闇惡屠』！」  
チエルノボグ

そして始まりを告げる聖杯探索。異界の使者たる力ナメにはまるで関係のない話。  
しかし彼は笑いながら言う。

「私は手を貸そう。全てが終わる、その時まで」

此処に全てが始まりを告げる。

第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン

第一特異点、其処にて彼等は復讐の魔女と狂化したサーヴァントと出会う。そして、  
目の前に立ち塞がる邪竜。しかしそれでも冒険者を止めるには至らない。

「別に奴を八つ裂きにしても構わんのだろう？」

第二特異点 永続狂気帝国 セプテム

立ちはだかるは歴代ローマ皇帝達、そして数多の軍勢。それを彼は仲間と共に切り拓く。

「仲間達よ、ここに集え！歩き続けた記録の荒野、その果てを此処に開示しよう！」  
『記録の地平線』!!

そして眼を覚ます破壊の大王、アルテラ。

「その文明を粉碎する」

「粉碎などさせない。私が貴様を此処で倒す！」

第三特異点 封鎖終局四海 オケアノス

見渡す限りの大平原、そこで神と会合を果たす。

(神様つて、何処もめんどくさい奴多いんだな……)

そして彼は伝説の英雄、ヘラクレスと合間見えた。

????????「——！」

「行くぞヘラクレス！命の貯蔵は十分か！」

第四特異点 死界魔霧都市 ロンドン

ついに顔を出した黒幕、魔術王ソロモン。

「貴様は……」

「私は冒険者。自由に生き、自由に戦い、自由に朽ち果てる。その先に何があろうと、私は私の心の向くまま進み続ける！」

越えるべき七つの特異点を超えて、ついに辿り着いた定礎復元の旅の終わりの地。

一終局特異点 冠位時間神殿 ソロモン 一

「さてさて、今日は椀飯振舞いだ！来たれ、我が仲間達！」

72柱の魔神柱。それを相手に、カナメの宝具はその限界を解き放つ。そして迎える、別れの時。

「行け、マスター立花。きっとお前には、幸福な未来が待っている」

「カナメ！手を!!」

消えて行く世界で、カナメは最後まで笑っていた。

「あばよマスター！達者でな！」



再召喚を経て、カナメは真にカルデアの一員となつた。しかし、その顔は現在あまりに苦々しい表情をしている。

「なあアンデルセン、これ何さ？」

「何、貴様の冒險を少年漫画みたいな面白恥ずかしく書き上げてやつたんだ。感謝してマスターに読ませてこい」

「いや誰がこんなもん読ませるかよ。恥ずかし過ぎて憤死するわ」

「まあ良い。受け取ったのならさつさと出ろ」

かつかつかと楽しげに笑うアンデルセンに部屋から追い出され、カナメは行き場を失つた『冒險者のGrand/Order』なる書物を抱えながら廊下をただトボトボと歩く。捨てるのは容易い。何故なら紙だ、カルデアの焼却炉に打ち込めばそれまで。跡形無く消えるだろう。

ことのないアンデルセンの書き上げた書物となると捨てるに捨てられない。

(一層の事ナーサリーにあげるか?)

そう考えて、それは名案だと至る。彼女ならこういう冒険譚も邪の心なく読んでくれる事だろう。それに大切にもしてくれるはずだ。

「なら早速部屋まで…………おつと!」

積み上げて持っていた本が仇となり、視界が塞がり前が見えていなかつた。その為に何もない少しカーブした廊下で誰かにぶつかる。衝撃で各特異点毎にまとめられた9冊の本が前へと倒れかける。

「よつと」

「あつ、マスターだつたのか」

倒れかかった本はぶつかった相手、マスターである藤丸立花によつて支えられて事なきを得る。無事だつた事に安堵し、詫びを入れようと体の向きを変える。そして視界に、どうやつて取つたのか自分が持つていた本の一冊、オルレアン編に目を通すマスターが写り込む。

「…………やつた

「へつ?」

「やつたあ!」

「何事つ!?」

突然喜ぶ立花に意味が分からず、カナメは驚きの声が上がる。そして更に、追い打ちとばかりに立夏の口から衝撃の事実が明かされる。

「アンデルセン書いてくれたんだ！よいしょ」

「……いや待てマスター！」

持っていた本全部を奪い取つて走り出すマスターを後ろから全力で追うカナメ。しかしヘルクレスからエウリュアレを抱えて逃げ延びたマスター、流石に追いつく事ができない。

その後、マスターは出来立てホヤホヤの本をサーヴァント達の元に無事持つていた。その所為でカナメの当時のテンションが公になり、ハイテンションで色々口走つていた当時の事が恥ずかしくなったカナメの黒歴史と化したのはまた別の話である。

# 番外編 カルデア生活 その3

長かつた冠位探索の旅路、長く辛く苦しい戦いの日々。時々イベントもあつたけれど、殺意や敵意を向けられる日々。何度も死を覚悟したりしたけれど、マシユとカナメのお陰で今も立花は生きている。

「立夏君、いるかい？」

「！　はい」

ドアが開き、そこからオレンジ髪の男性が入つてくる。白衣を着た彼にマスター立花は笑い掛けてその名を呼ぶ。

「どうしたの？ 口マン」

其処には元魔術王”ソロモン”、ロマニ・アーキマンが立つていた。その手には小さな白い紙袋が握られている。

「さつきカナメ君に友好の印にと貰つたんだけど、君の分も渡されてね。『2人で食べてくれ』だつてさ」

「そつか。じゃあ、お茶淹れるよ」

ベッドから腰を上げ、お茶を淹れる為の用意を始める。その最中にも頭ではカナメと

いうサーヴァントの事を思い浮かべる。

万能の天才ダ・ヴィンチちゃんですら行えないと言ったロマニ・アーキマンの呼び戻し、それを彼は悠々とこなしてみせた。これには流石のダ・ヴィンチちゃんも呆れて笑っていた。マシユは感謝で涙していた。立花も今までにない程のガチ泣きをしてしまつた。

『確かにソロモンという靈基は座から消滅した。それは確かに揺るがない事実だから、ソロモン王を呼び出す事は出来ない。』

『でも、それは飽くまで消えたのは座の登録のみ。魔術王ソロモンとして召喚出来なくなつただけだ。彼の人としての存在であるロマニ・アーキマンの記録は、記憶は、思い出は、魂の輝きは俺たちの中に残つていてる』

『なら、私が手繰り寄せられる。私の宝具は他者を絆の繫がりという綱で引っ張り、一時的ながら現世に召喚させるものだ。ある意味、俺を再召喚出来て幸運だつたな、マスター』

『必要な物は、触媒代わりのロマニが良く使っていた物とお前達の想いの力、後現実に固定する為の聖杯だ。早速始めよう』

『我と繋がり持つ者、その名はロマニ・アーキマン。私は望む、彼は願う、彼女は祈る。』

果てに浮かぶその魂よ、想う者の繋がりを手繕りて、我が宝具の力にて具現し、杯を核とせよ!!』

彼の力によつてロマニは現実に呼び戻され、聖杯にて肉体を得た。その際に「あんな別れ方しといてこんなあつさり……」と顔を真っ赤にして恥ずかしがつていたのはまあ、蛇足だろう。

規格外の英靈、カナメ。その異常性は常々理解していた気になつていたが、それでも全く足りていなかつたと思い知らされる。恐らく一生感謝し続けても足りない。現に信仰心の薄いカルデア所属のスタッフですら社でも建てて祀らなければならぬのでは?と内心密かに想うほどである。ある種宗教の信仰めいてきている気がしないでもないがその思考に突つ込みを入れるものは誰も居ない。

少数派が多数派に喰われるという話である。

茶を飲みながらカナメが作つたトリュフチョコを摘んだ立花とロマニ。  
(料理の腕前までプロ級とか何者だよ……)

というツツコミをしながらも何処かのドラ娘の様なポイズンクッキングじゃないだけマシかと考えを改めて感謝しながら頂く。そして丁度いいからとマスターは女性サーヴァントに貰つたチョコを幾つか、ドクターは職員に貰つた義理チョコをいくつか摘みながら茶会を楽しんでいた。

「…………オオオオオ」

「ん？」

「誰の声だろう？」

しかし、微かに聞こえた叫び声に2人は疑問符を浮かべて立ち上がる。バーサーカーだろうかと一瞬考えたが、立花には理性のない者の雄叫びではないと直感的に理解して、廊下に顔を出す。そして向かってくる男の必死な顔と後ろか追いかける女性達を見て思わず顔を痙攣らせた。何事かと顔を出したロマニも同様である。

「マスター！ チョコは味わつてくれたな？ それなら良し！」

何が良しなのか、それを問う間もなく走り去つていった。その後ろを追いかける金髪アサセイバーと白髪バーサーセイバーは立花とロマニですら止められない。その手には比較的大きめの箱が抱えられており、匂いからして中身がチョコである事を理解する。それと同時に恋する乙女つて怖いなあ～と改めて実感させられる2人であった。



カナメは走る、ひた走る。後ろからついてくる気配を振り切るべく走り続ける。

「待ちなさい！」

「待つて……！」

付いてくる金髪アサセイバーと白髪バーサセイバーの制止も聞かずに走り続ける。何故なら、それ相応の理由がある。

カナメはチョコ、もとい甘い物は好きだ。だからブーディカ達から渡された義理チョコは有難く受け取つた。しかし、XとXオルタのチョコからは易々受け取つてはならない予感、そして少量の確信を持つていた。

まずXのチョコはドウ・スタリオンII型のチョコレート。細工に凝つていて見た目は綺麗で美味しそうに見える。しかし、酒を大量に混入している様で異常に酒臭い。マスターらにはミルクチョコだつたはずなのに何故か彼にだけ大人（高度数の酒）チョコである。

Xオルタはおはぎ。こちらも見た目は良いし匂い自体も餡子の香りでヒロインXの物に比べて全体的に優れているかに思える。しかし、カナメの直感EX（嘘）は誤魔化されない。必ず何かあると胸の奥で警鐘が鳴り響いている。

「待てって言われて大人しく待つ奴がいるか!!」

さすがに地雷原の上をタップダンスする様な安請け合いな行動はカナメでも絶対に取らない。如何に善人でも起爆スイッチとわかり切ったボタンに手を掛けたりしない。「ダーリーン、待つてえーーー！」

「いやアアアアアー！」

「おわっ!?」

突然一室から飛び出してきたクマのヌイグルミを飛び越えて躊躇する。そのヌイグルミ（オリオン）の体にはチョコが付着しており、何があつたのか想像出来ないし誰もしょうとはしない。

「あっ…………」

そして此処で影響して来る本家よりランクダウンした直感。咄嗟に出来ずに2人とも片脚ずつオリオンに足を引っ掛けた。普段なら、まだ蹴り飛ばす程度で済んでいただろう。しかし今回はチョコによつて床との接着が強まつており、2人の体は前に向かつて傾いていく。

「やべっ!?」

思わず、2人を助けるべく床を先程とは反対に蹴りとばし、スライディングして落下地点に構える……なんの警戒もせず。

「今っ!!」

「なつ

」

助けようとしたカナメになんたる仕打ちか。2人はその状況を逆に利用してバレンタインの贈り物を口にねじ込む。これのどこがハッピー・バレンタインなのだろうか？こんなもの側から見たらアンハッピー・バレンタインである。

「や  
つ  
た  
ぜ」

2人の勝利を確信する様な声を聞きながらカナメはパツタリと気絶してしまつた。

次目覚めた時にはXのチョコによる強力な酒による酔いとXオルタのおはぎに混入されていてあろう精力剤の所為で昂ぶつてしまい前者2名と色々あつたのは彼と彼女ら内での話……。

# 始まりの第一章

## 1殺目 ハサンという男

ハサン＝サツバーは手に持った食物を口に投げ入れた。

（味がしないな…………）

目の前に置かれたサンドウイッチを一切れ咀嚼し、顔を顰める。まるで水でふやかした味のない煎餅の様な、決して美味しいとは呼べない味に表情を顰めつ面から徐々に虚しさの籠つた物に変わる。此処で不味いと吐き捨てられればどれだけ良いかと思案してしまう。食感は普通のサンドウイッチで、決して吐き気が込み上げてきたりなどの体調不良はない。それでも余りに虚しくなる。

（他の3人は………）

ハサンは気を紛らわすつもりで共に行動している3人に視線を移す。

「…………」

まずに見たのは白いローブを着込み、側に背丈以上はある長杖を置いた目つきの悪い三白眼に眼鏡をかけた付与術師のシロエ。

「…………」

次にがつしりとした体格の体を覆う様に鎧を着込んで男らしくも、明るい瞳と垂れめのまなじりが少年ぽい守護騎士の直継。

「…………」

黒曜石のような艶やかな瞳に一括りに纏められた黒髪、小柄なシユツとした体型に闇に紛れる黒い軽装束を纏つた暗殺者のアカツキ。

「「…………」「」

「はあ…………」

三者三様、手を付けている食事はそれぞれ違う。腹の足しにすべく量が多いが味のない料理を食すシロエと直継、味のする生の果物を齧るアカツキ。誰も言葉を交わさない。ただ沈みきつた食事風景に一足早く食事を終えたハサンは大きく溜息を吐くことしか出来なかつた。



”エルダー・テイル”

日本人だけで約10万人、世界的には2000万人の愛好家がいるオンラインゲーム。其処の弧状列島ヤマトの東部、エルダー・テイル日本サーバーの中心都市”アキバの街”

其処で冒険者として生きていく事を、唐突に課せられたシロエは情報不足の焦燥感や戦いの恐怖の克服に内心を焼かれながらも心の支えとなる事があつた。

(ハサンが味方で良かった)

街の外のマップ『書庫塔の林』にて戦闘訓練の際に倒したモンスターの剥ぎ取り中、横で黙々と作業をこなすハサン＝サツバーの存在がシロエに大きな安心感を与えてくれている。

まず、シロエ自身は付与術師という職業だ。その本分は味方のサポートであり、攻撃はからきし。相手のレベルが低ければシロエ一人でもなんとか出来なくはないが、レベルが高いモンスター複数体を相手取るとなるともう無理だ。後衛職である付与術師のステータスでは為す術なくやられてしまう。

直継は守護騎士という職業だ。職業の特徴である高い防御力と体力、敵の注意を引きつける特技などで敵の攻撃を一手に引き受けるタンク役。攻撃も出来なくはないが、防御寄りなぶん火力に欠ける。シロエの補助があれば攻撃役にも転じられるがそれでも

心許なさはある。

アカツキはハサンと同じ暗殺者という職業だ。武器攻撃職という部類に分けられ、高い攻撃力で攻勢に出る純アタッカーである。でも、彼女は面と向かっての戦闘に向いているとは言い難い。どちらかというと素早い動きで敵を攪乱しながら攻撃する単独戦闘に向いている。それにまだ知り合つてばかりの小柄な少女に前線を任せられる程、シロエも直継も焦つてはいないし冷めてもらはない。

ハサンはアカツキと同じ暗殺者。しかし、アカツキのそれとはまるで毛色が異なる。いや、既に彼は別種の生物……言うなれば犬と猫の差、そもそももの比較対象から異なつているのだから。

(“歩み寄る死”なんて呼ばれる訳だ……)

彼の装備は暗殺者としての機動力を奪う代わりに即死攻撃の成功確率を引き上げる装備を重点的に纏つている。その上、彼の持つ武器は通常攻撃にも即死効果を追加する効果がある。防具との相乗効果で彼の握る幻想級武器『告死の剣』は即死率10%という高さを誇り、その剣から放たれる即死効果を持つ技は本来より遥かに高い即死確率を有する。

要は彼に斬りつけるチャンスがあれば、特殊なエネミー以外なら何であろうとも確率ではあるが、体力満タンでも殺す事ができる死神の様な男なのだ。現に今日も、その火力も相まって3分の2は彼がとどめを刺している。

勿論シロエ達は決して彼に戦闘を押し付ける事なく、自分の脚で自分の戦いを模索している最中だ。それでも、彼の強さには背中を任せられる安心感がある。それに戦闘で臆する様子がなく、敵の迫力で腰を抜かし掛けたシロエや大きな一撃を受けて体勢を崩した直継やアカツキの補助までこなしている。シロエや直継より小さい170cmちよいの背丈、それでも背中は誰よりも大きく見えていた。

(それにも……)

シロエは不意に微かな気配を感じた方向に目を向ける。それによつて周囲を警戒する為、男3人より離れた場所を動き回るアカツキの視線が時たま彼に注がれているのに気づく。彼女とは戦闘スタイルが異色の暗殺者、それでも優劣どうこうを争いなどしない。どちらもどちらで素晴らしい、それがハサンとアカツキの共通認識である。

それにハサンは温厚で面倒見が良く、懐の深さも段違いだ。他者の意見をちゃんと尊重できる器量も持ち合わせている。このストレス溢れる時代にどんな生活を送つたらそんな人格者になるのか不思議なくらいだ。

本人はその話題になる度に「まあ……うん……」と染み染みと懐かしむ様な、それでいて何かに恐怖する様な声になる為、聴きづらくなつて未だ誰もその真相を知らないのは完全に蛇足である。

「あー、取れた取れた。がつぽりだぜ」

「こつちも終わつた。そろそろ引き時だな」

粗方素材は剥ぎ取れ、採取用の鉈にべつとりと付着した血液を振り払う直継とハサンを見てシロエも杖を下ろし待機していた呪文をキヤンセルする。

「はあ…………」

そして肩を竦めながらため息をついた。人というのは色々と背おい込みすぎると特に意識せず溜息が漏れるものだ。

「何かあるなら、いつでも言えよ?」

軽くシロエの背を叩いてハサンは笑い掛ける。それだけで微妙に感じていた重圧が薄れたような気になり、肩が軽くなる。彼はきっと特に意図せず、辛氣臭い表情をして

いたシロ工を心配してやつた事なのだろうが、人を励ますツボという物を無意識に抑えていると、シロ工は昔を思い出しながら考える。

”放蕩者の茶会“  
デボーチエリ・ティーパーティ

かつてそれはレイドコンテンツ攻略を目的としたサーバートップのギルドに引けを取らず対等に渡り合つたギルドでもなんでもない伝説のプレイヤー集団。一癖も二癖もあるメンツの中でハサン＝サツバーサは常識人の枠に収まる存在だつた。誰にでも好意的に接し振る舞う姿は暗殺者という職業に合つておらず、彼の噂だけを聞いて挑んできたPlayer・Killer、通称PKは彼を散々馬鹿にしたという。その後彼らがどうなつたかは言うのも恐ろしい惨状だつたと茶会内で囁かれていた。

閑話休題

彼はどんな事があつても他人を責める真似はしない。失敗は誰しもあると笑いながら言い、次に生かす事が大事だと背中を押す。それで垂らし込まれたプレイヤーは数知れず。そんな若干罪作りな男こそハサン＝サツバーサである。

「どうした？シロ工殿」

気づけば、アカツキも荷物の整理を終えたのかシロエの近くに寄り、下からその綺麗な瞳で彼を見上げる。それを受ける側のシロエは落ち着かない気分ながら、それを悟られぬようにはにかみながら「帰ろうか」と言い歩き始めた。

陽は落ちかけ、夜が近づいていた。

## 2殺目 アカツキの想い

日が落ち、太陽の光が失われた森に明かりなどない。しかし月の微かな明かりが木々の間から零れ落ちる。そんな近代都市では味わえない様な自然の一時を静かに感じながら、アカツキは身軽な身のこなしで太い木々の枝々を飛び移りながら個別行動開始前に決めた合流地点へと移動していた。

（ハサン＝サツバーハ……エルダーテイル五本指に入る凄腕の暗殺者）

ふと思い起こしたのは同職業の男の姿。持っている装備品は古参であるという事もあつて剣と各種防具のレベルに差があるのは分かる。しかし、それ以上に彼はアカツキと異なる戦術を行い、それでいながら暗殺者としての風格を漂わせている。

ハサンの攻撃は有無を言わさない一撃の剣。アカツキの様な相手の不意を突く忍びの様な戦い方とはまた違う。それでも彼はまさしく暗殺者、命の灯火を一瞬にして搔き消す。

（かつこいい）

彼女は彼の戦い方を素晴らしいものだと思う。勿論自分の戦い方を悲観しているわけではないが、彼の戦い方は決められた戦術、例えるに敷かれたレールから大きく掛け離れており、下手すれば役立たずにするなり兼ねない綱渡りな物だ。しかしそれに浪漫と通説を破る快感がある事はアカツキも理解出来る。

(それに……)

思わず熱くなる頬を冷ます為に頭を振る。彼女は自分でも初めてなこの感情に制御の仕方が分からず困惑していた。

彼女は大学生でありながら圧倒的に身長が足りていらない。そしてその容姿から子供と勘違いされ、居酒屋で飲酒をお断りされる程だ。生真面目な彼女の1番のコンプレックス。それに加えて数歳年下である近所の中学生から同い年と勘違いされて告白された事がトラウマで恋愛には疎遠、特に惚れ込む異性もいなかつた。しかしそれが今、この異世界に来て急に現れた。

元を辿ればゲーム時代、高身長の男をプレイヤーキャラに選び寡黙なキャラを演じ、ボイスチャットで会話を交わした事はなく文面での会話を主としていた彼女だったが、ハサン＝サツバーハは優しく語り掛けた。

今日は全国的に日差しが強い事だつたり、最近ゲーム内で金策の為に特定のモンスターを狩る事が流行つてゐる話だつたり、大学生のアカツキが興味を持つ様な政治経済の話からエルダー・テイル内の事、天候や趣味についての事、話した事は多岐に渡る。

よくもまあこれだけの話題を、自分の様な無口でサッパリした相手にするものだと呆れた事もあつた。でもそのやり取りが知らず知らずの内に彼女の楽しみになつていて。しかし彼とアカツキだけを相手に出来るわけではない。ある時期を境にパーティーを組む事は出来なかつた。その後暫く、彼女はどこか物足りなさを感じていた。

そしてこの世界で目が覚めた数日後、有る意味リアルでの再会を果たした。

『久し振りだな、アカツキ』

彼は彼女を覚えていた。ゲーム時代と見え方は変わつた。状況も環境も一変した。それでも彼はいつもの様な振る舞いを取つていた。

だからこそ、アカツキは自身が女である事を明かす事に恐怖を覚えた。外見を変化する薬剤を譲つて貰い、いざ口にしようとしたときにその問題にぶち当たつたのだ。今まで性別、容姿を詐称していた事を知つたら彼はどう思うだろうか？嫌われるのではない

か？などと言ひようもない不安が彼女を苦しめた。

それでも飲まざるを得なかつた。手足の長さが元と大きく異なる所為で自由が効かない状況。それを打破しなければならない以上薬は飲まざるをえなかつた。その結果、彼の反応は……。

『ヘエ～～』

なんて事もない。変な目で見る事なく、そういうつた動搖が現れた訳でもない。まるで前から知つていたかの様な適当な驚き方に、拍子抜けしたと同時に、嬉しかつた。直継はちみつこ呼ばわり、シロエも身長と性別の大きな変化に何やら思う所のある様な微妙な顔をしていた。でも彼は変わりなくにこやかに振る舞う。

その時の笑顔が、彼女の胸を撃ち抜いた。もしかしたら心労の溜まつた状態で吊り橋効果的な事が起こつたのかもしれないとも考えた。でも、それでも良いと思つた。  
(今は……)

安全な街まで帰る事に意識を戻す。だいぶ移動した事でもうすぐ集合地点という所まで着いていた。気持ちを引き締め直し、次の枝に移動する為に足に力を入れようとしました瞬間、遠くの方でシロエの物でも、直継の物でも、ましてやハサンの声でもない、野

太い男の声が響いて来た。

## 3殺目 P Kとの死合

アカツキが異変に気付いた頃、同じ様にシロエや直継、ハサンも異変に気付いた……  
というより巻き込まれる寸前の場所にいた。

「ん？」

最初に違和感に気付いたのはハサン。彼は暗殺者として本来奇襲や不意打ちを得意とする職業。その為気配の把握能力に優れ、レベル90共なると広範囲に及ぶ。彼の場合それだけではないのだが、それはまた追い追い。

（気配は四つ、レベルはそれなりの高さだが……技量が追いついていないな）……シロエ、直継、前方数十メートル先に敵の気配。反応は四つ

耳を澄ませ、聞き取った呼吸音や足音を聞き分けそれだけでレベルの高さとその人間の持つ技量を測り取ってみせる。しかしあくまで思考していた情報は表に出さない。自分の中に留めておく。

「了解っ！」

何かに気付いた直継はその場を離れようと後ろに飛ぶ。しかしその足には既に半透

明の魔術で生み出された鎖が絡み付いていた。威嚇に放たれた束縛用呪文。

「チツ！」

後ろへの跳躍エネルギーは鎖によつて押さえ込まれ、殆ど下がる事が出来なかつた。流石に直継も苛立ちで舌を打つ。

パキッ!!

しかし次の瞬間には、その鎖は姿形なく消え失せた。付与術師の魔法、ディスペル・マジック。魔力で出来たものに對してシロエのそれは抜群に効果を發揮する。そして状況把握からすぐに放つ辺り、流石は放蕩者の茶会の参謀である。

(相変わらず、抜群の反応支援だなつ!)

(やつぱり、安心感が違うな)

前衛2人に湧き上がる高揚感と戦闘意欲。背後にシロエという守るべき確かなものがあり、しかもその援護を受けられるという自身が2人を気迫で満たす。

「直継を最前列に置いた直列のフォーメーション!」

シロエの指示に従い直継を最前列に据えた直列のフォーメーションを取る。そしてその間にシロエは付与術師の攻撃呪文マインド・ボルトを放ち、その輝きが一瞬ではあ

るがPK達の顔を照らす。確かに4人、その姿を把握できた。

2人はシロエとの距離に注意を払いながら敵を待つ。直継とハサン、2人かかりなら突っ込んでも大した問題ではないのだが後衛の存在がある以上、下手に突っ込む事は防御を削りシロエを無駄な危険に晒すこととなる。だからこそ、向こうから出向くのをじっと待つ。

「いい度胸してるぜつ。 なあ、ハサン」

「ああ、全くだな」

直継は胸糞悪いとばかりに吐き捨て、ハサンもそれに同意する。目の前にいるプレイヤーは、2人にとつて最も嫌うべき行為を好む輩なのだ。そういう態度でも無理はない。

プレイヤーキル、略してPK。プレイヤーを攻撃し死亡させ、そのアイテムや金品を奪い取る最低の行為。それに対して直継はもちろん、誰にでも温厚なハサンが怒りを露わにしている。

(取り敢えず、不意打ちは防げたけど……此処からどうする?)

シロエは杖に明かりを宿しながら思考を展開する。使用できる魔法アイコンを想起する。脳裏に広がるメニュー画面にカーソルを当てることなく、普段よく使う呪文は全

てショートカットスロットに登録してある。しかしシロエが杖を構えるまでもなく、前方の暗がりの中から4人のプレイヤーが現れる。アスファルトのかけらを踏み碎く音が、夜の静寂に意外な程大きな音を響かせた。



戦士風が1人、盗賊風が2人、魔術師系が1人。数は多く、装備も高レベル帯の物でレベルが低いなんて事はなさそう。それがシロエの見解。

対して、有象無象の屑4体でレベルばかり高く人間としての程度が低い。それがハサンの見解だ。

彼をお人好しで温厚な”だけの”人物だと思っているプレイヤーが耳にすれば、誰もが目を丸くして震え上がるような、他人を見下すような威圧感を放つた事にビックリするだろう。だがこれが彼の本性……という訳ではない。彼の本質はお人好しで温厚だ。

但しハサンが周囲に良くするのは自分の為、要は自己満足。彼はそれを偽善だと自傷していたが、周囲は誰一人としてそうは思っていなかつた事を彼は知らない。ともかく、必要ないと思つた相手には決してしない。寧ろ、全身全靈で叩きのめすまである。

「黙つて荷物を置いていけば、命までは取らないぜ？」

戦士風の男が見下すようなお決まり文句とも言える恐喝台詞を吐く。シロエはその台詞に苦笑を誘われる。

（漫画の読み過ぎじゃないかな？その台詞……）

前衛2人の安心感に、敵の台詞に反応出来る余裕が生まれる。そんな彼の視線とハサンの視線が交わる。戦闘のために下ろした頭部装備『暗殺王の呪面』を通した彼の瞳は青く輝く。その奥に秘めた感情をシロエは読み取つた。それは、シロエと同じ苦笑だった。

「守護戦士に魔術師、暗殺者が1人か。でもこつちは4人だ、無駄な足掻きでもしてみるか？」

リーダー格らしき盗賊風の男が言う。それに対してハサンは彼らの頭の弱さを憐れむ。足し算覚えたての子供の様な思考回路に彼は悲しんでやる事しかできない。確かに相手は4人こちらは3人、単純計算なら4対3で相手が人数的に有利だ。しかし、ハサンはこんな言葉を知つてゐる。

”1+1が必ず2になるとは限らない。それが勝負の世界である。”……と。

例を挙げるなら奴らは二刀流が一刀流より強いと言つてゐる様な物だ。全てにおいて中身は大切、量より質だ。それをハサンは身をもつて知つてゐる。

「直継、どうする?」

「殺す。そもそも他人様を殺して遊ぼうつて連中だ。当然他人様に殺される覚悟なんてオムツが取れる前から決まつてゐるだろうさつ!」

いよいよ本格的に直継がブチ切れている。普段は怒らない人間ほど怒ると怖いと言ふが本当らしい。盾で地面を叩きながら威圧する直継を横目に見ながら、ハサンはシロエに視線を送る。彼はハサンの意思を察し、口を動かす。

「直継はPK嫌いだもんね。……僕はお金払つても良いんだけどさ、一度くらいなら」「私もかな。面倒ことは嫌いだし」

シロエの言葉に一味がニヤリと笑う。そのまま一步を踏み出し、醜い脅迫の意思を見せつけてくる。当然だが、そういうことに耐性がないシロエは思わず目を背けそうになる。それでも、身体に入れて背けない。自分を守る様に立つたハサンが動じていないので、隠れる様な位置にいる自分がへこたれはならないと意地になれた。

(……つまり、僕は舐められてるんだ。脅せばお金を出しそうだつて思われてる訳だ)  
 (つくづく、救えない奴らだ)

シロエは争い事が嫌いだ、だが苦手じやない。  
 ハサンは怒る事が嫌いだ、だが苦手じやない。

「まあ僕達に勝てるものならね」

「よく言つたぜ！」

2人の声が重なる。ハサンに至つては、言う台詞が分かつていたのか一人称まで合わせて宣言する。それに対しても直継は嬉しそうに声を上げた。そんなやり取りが苛ついたのか、野盗一味は口々に罵声を上げながら武器を抜く。それに合わせて、シロエ達も臨戦態勢に移行する。

「直継は第1標的左前方の戦士っ！牽制も任せた！」

「そこの守護戦士と暗殺者は俺たちが殺る、お前は魔術師をサクッとやつちまえ！」

シロエの指示と野盗のリーダーの怒鳴り声はほぼ同時だつた。直継は鋭く一步を踏み込んで敵リーダーにその手に持つた盾を叩きつける。対して野盗のリーダーの指示を受けた女性の盗賊は直継を無視して大きく回り込む様にしてシロエを狙う。しかし当然、長年共に戦場を駆け抜けてきたチームがそんな事を許す訳がない。

「貴方は私が相手になろう」

「つ!?

彼女の振り下ろした双刀はハサンの構えた剣に阻まれる。その事に女は目を丸くした。ハサンはシロエと直継の間、それもシロエに近い距離で立っていた。つまり、最初からリーダーともう1人の攻撃役を守護戦士一人だけに任せる気で彼はシロエの側まで下がつていたのだ。

「チツ!!」

「太刀筋が甘いぞ!」

二刀の連撃がハサンを襲う。しかしその攻撃を一刀のみで易々と弾き、払い、退けてみせる。

「アンカーハウルツ!」

対して直継はターゲット集中の技を放ち、前衛2人を引き止める構えに入る。これで戦力の分裂を成功させた。

「エレクトリカル・ファズ!」

更にそこへシロエの持続系攻撃呪文であるエレクトリカル・ファズが飛ぶ。各弾見事に敵に命中、しかし、それを受けても敵には何の変調も大きなダメージも発生しない。

「何だこのちっぽけな呪文は?こんなダメージじゃ犬も殺せやしねえ!!」

男達はシロエを嘲笑う。しかしシロエはそれに反応を示さない。罵声も中傷も、彼にはあまり効果がない。薄っぺらい言葉に、怯むことなどない。

「ふん、私達の仲間を嘲笑うとは……万死に当たる！」

ハサンの一振りに先ほど以上の力が籠り、女盗賊に距離を取らせる。その目には次で決めるという意志の力が籠つていた。

「ソーンバインド・ホステージ！」

「喰らいなつ！」

シロエの放つた設置型呪文、ソーンバインド・ホステージによつて敵に巻きつけられた魔力の荊を直繼が剣で切り裂くと対象の武士サムライは剣撃の後から襲つてくる閃光に飲み込まれた。

「くそッ！何やつてんだヒーラー!?」

リーダーの怒声が響く。既に武士の男の体力は限界、自身と女盗賊の体力も半分を切つている。それでも回復が行われない事に焦りを覚えての大声。しかし後ろで立っていたヒーラーは答えを返す事なく膝から糸の切れた人形が如く崩れ落ちた。その口からは静かな寝息が聞こえる。シロエのアストラル・ヒュプノ、敵を眠らせる停止呪文。それが決まつた証拠である。

「何つ!?」

「余所見してんじやねえよ！」  
「しまつグハツ!?」

突然のヒーラーの脱落に目を奪われたリーダーは直継の攻撃をモロに受けて地面を転がる。そこに立ち上がる事を許さないとばかりに向けられた直継の剣。そして、女盗賊の方はどうと……。

「しかと見よ、死神の一振りを」

研ぎ澄まされた刃の様な鋭利さと絶対凍土の冷気が如し冷たさを内包した宣告がハンサンの口から漏れる。その声に反応し、身構えてももう遅い。抜かれた剣は的確に首へと向かう。

「終告の刃」——終わりだ、『夜闇悪屠チエルノボグ』

即死。首が吹き飛び、悲鳴すら上がらない情け容赦のない必殺の一撃が決まり、ハサンは剣に付いた血を振り払つてからそれを鞘へと納めた。

状況からして完全にチエックメイト。それでも男は喚きあげる。  
「おいつ、妖術師ソーサラ！ 召喚術師サモナ！」ここまで来たら総力戦だ。こいつらを消し炭にしてや

れっ!!

まさかの伏兵、と誰も驚きはしない。そもそも、シロエら3名は戦闘開始時からその存在には気づいていた。正確な場所は特定していなかつたがそれも、もう1人の仲間のおかげで気にかける必要すらなかつたのだ。

「僕達の、勝ちですね」

「そうだな」

「お疲れ様、流石は忍びだ」

三者三様に、森の1方向へ声を投げる。その方向から暗い森を抜けて1人の少女と、その少女に首元を掴まれひこずられる魔法攻撃系職の2人が姿を現す。どちらも息をしていない、どちらも完全に事切れている。

「ひつ…………」

死に絶えた2人を見て自身しか生き残つていない事を理解したのか、男は恐怖から小さな声を漏らす。そして震えながら両膝を揃えて正座し、手をついて地面に額を擦り付ける。

「すいませんでした！もうしません、許して下さい！」

そして謝罪の言葉。しかし、流石にここまでやつておいてそれはないだろうと呆れる一同。その一瞬、彼に対する意識が散漫になつた。それを突くかのようにリーダーの

男は隠しナイフを抜き放ち、シロエに向かっていく。

「なんて言うと思つてんのかこの馬」

その言葉は途中で断ち消えた。彼はシロエを狙つた、其処まではまあ……狙う相手は良かつたと褒められる。しかしその分、男は簡単なミスを犯した。狙われやすい物は、逆に言えば守りやすくもある。シロエが狙われる事を予感していたハサンが彼の隣に立つていた。それが仇となつたと言つていい。

来る事が分かつっていたとばかりに剣を抜いた彼に油断はない。

「裁ソード・オブ・ジャッジきの剣」

剣が男の胸を貫き、体力を消し飛ばす。裁きの剣特有の一撃必殺を現す黒い靄の様なエフェクトが生じ、間も無くして男は持つていたアイテムや金銭をばら撒きながら息を引き取つた。血を吹き出す事もなく胸に大穴が開いた遺体は直ぐに消えてなくなつた。

こうして初のPK戦は静かに幕を下ろしたのであつた。

## 4殺目　　目指すは遙か北

ハサン＝サツバーハ、彼は優しさの塊の様な青年だ。誰かが苦しんでいれば無償で手を伸ばし、誰かが下を向き泣いていたらその涙を拭い上を向かせる。そんな彼でも、現在の状況は旗色が好ましくない。

「ススキノに遠征……ですか？」

中小ギルド、三日月同盟のギルドマスターの部屋。其処のソファーに腰掛けっていたシロエはそう尋ね返す。それをギルドマスターであるマリエールと会計を担当しているヘンリエッタの両名とも頷いた。

「大災害があつた日、このギルドの新人で……セララという女の子がススキノにいたのですわ。ススキノで丁度レベル20くらいのダンジョン攻略プレイの募集がありまして」

「それで1人でススキノに取り残されてしまつたと」

「はい」

ヘンリエッタは深くため息を吐く。決して、呆れてのものではない。心の底から心配

で心配で仕方がない、そんなため息だ。

「迎えに行くんですか？」

シロエの質問に、マリエール達はなんの躊躇いもなく頷いた。

「私達はよく知らないが、事件後にススキノに向かつたプレイヤーはいるのか？」

アカツキの質問が4人の疑問を代弁する内容だった。それはシロエもちらりと考えた事であり、ハサンに至つては大方の予想の付いていたことだった。

主要都市を瞬間に移動するトランスポートが大災害以降不調で使えない以上、残る手段は二つ、一つは各地に残つた日替わりでランダムに転移場所の変わる妖精の輪(フェアリーリング)を運用するか、眞面目に陸路を進み、いくつもの危険区域を通り抜けて北を目指す他ない。

「いや、うちが知る限り、1人もおらへん」

マリエールの口から、まあ当然であろう事実が口にされた。ただでさえ当然の異世界で困惑しているこの時期だ。街の外の危険区域をいくつも跨ぐような旅を無闇に行なう奴など早々いるわけがない。

「今、救援を出す理由は？」

アカツキが切り出す。同時にシロエとハサンが少し体制を前屈みにして視線を飛ばす。どちらとも、それが問題の中核である予感をヒシヒシと感じていた。

「それは……」

「あー……なつ？うん……救援は前々から出す予定だつたんよ！あんな北の果てで一人  
ぼっちやなんて可哀想やし、心細いやろ？」

言い淀むヘンリエッタ、そして言葉にはするも何処か手探りでいつもの明るさと元気  
良さのないマリエール。

「マリ姐」

「マリエ」

「そんな目で見ちやダメやで、シロ坊にハツサン。シロ坊は目つきちつとばかり鋭いん  
やから……それにハツサンも。女の子にモテへんようになつてまうで？」

少しでも、話を濁そうとするマリエール。

「マリ姐」

「マリエ」

シロエもハサンも決して押しが強いタイプではない。だが、今はそんな事をいちいち  
気にしている場合ではないと、共に重ねて問いかける。

「…………ススキノな。此処より治安悪うて、それで……セララなあ、ガラの悪いプレイ  
ヤーに襲われたん」

ギルマスのマリエールが構築したパステルピンクのファンシーな部屋に、それはひど  
く不吉に、不気味な程ピツシャリ響いた。

大きな街は基本戦闘禁止区域だ。それはアキバも、ススキノも変わらない。ダメージを受けるような武器使用や魔法の使用は禁止されている。また『キヤラの移動不可能化』などを引き起こす通せんぼうや拘束行為も禁止行為とされる。

しかし、現実での犯罪行為が全て禁止されているかといえばそうではない。特にこれが、レベルの低いか弱な女の子相手となるとPKなんかよりもタチの悪い事は存在する。

「…………」

アカツキの表情が一層厳しくなる。彼女も女性なのだ。マリエールの言つた『襲われた』という言葉に秘められた他の意味も同じ様に理解したのだろう。それに気づいたのか、マリエールは少しばかり訂正を挟む。まだ大事には至っていない、と。

そしてその後をこう締めくくる。彼女を救出に向かう遠征の間、三日月同盟の居残り組の面倒を見て欲しいと。2人は揃つて、懇願するかの様な悲痛な表情で頭を下げた。

ハサンは意見を強引に押し付けない謙虚さや周囲に流されない芯の強さを備えてい

るが、他人の意見に口を挟む事は苦手としている。それが間違っている事なら待つたを掛けるが、間違っていないのに待つたを掛ける事は難しい。

それは彼にとって見知ったマリエールとヘンリエッタでも同じ事。寧ろ親しいからこそ、その気持ちが痛いほど理解できてしまう。仲間がピンチなら駆けつけたくなる気持ちも理解出来るし焦る気持ちがあるのも分かる。

(だが……危険過ぎる……)

エルダー・テイルのハーフ・ガイア・プロジェクト下では秋葉札幌間は直線距離約420 km。馬の平均走行速度が30 km/hとして真っ平らな平地なら約14時間で着くことができるが、実際は山岳や河川、海峡に天候の問題からその十数倍はかかる。更に移動や戦闘の疲れを取る小休憩や野営の時間も計算した上、プラス $\alpha$ でモンスターとの戦闘がある。レベル90ならば序盤はモンスターのレベルが低い分問題なく行けるだろう、だが後半になつてくれば必然的に平均レベルの高い場所を通らなければならぬ。

(そうなれば……)

ハサンは小竜を思い浮かべる。彼は三日月同盟のレベル90 盗剣士で腕に問題はない。でも彼はシロエから見ればまだ若く未成熟な面が目立つ。心身共に負担の大きい

長旅に耐えられるかと言えば、難しいと言わざる得ない。せめてマリエールとヘンリエッタ、小竜以外にも他数人のベテランプレイヤー、欲を言うなら放蕩者の茶会レベルの凄腕が居ればまだなんとかなる可能性もあつただろう。

(いや…………それでも……)

しかしその可能性も、あくまでススキノに到達するまでの話だ。ススキノは治安が悪い無法者の吹き溜まり。そんな所にマリエール達を送り届ける事は出来ない。最悪彼女達もセララと同じ運命……それ以上の事もあり得る。

(シロエは…………どうする?)

彼は参謀へと視線を向ける。其処には視線を下に向け、考え込んでいるシロエの姿があつた。



(こうなると…………僕達が行くべきだ)

戦闘時は優れたタンク役にして、非戦闘時もメンバーを励ます事に務めてくれる直継。

暗殺者＋サブ職業追跡者による威力偵察が可能なアカツキ、そしてサブ職業は違えど

十分な技能を持つハサン。

更に付与術師として味方を補助しつつ、戦闘やその他の物事での重要な参謀を任せられる自身。

100%ではないが、マリエール達が行くよりも可能性は高いとシロエは判断する。しかし、シロエは口を開けずにいた。

いくつもの想定を立てて、該当しない物を弾き残つたものに更に条件を加えて絞り込んで行く。その中で期間の短縮、成功率の上昇も図っていく。ドンドンと数が減つて行く。やがて一つの結論、先ほどの判断と同じ結果に至つた。しかし、余計な気遣いであると、出しやばり過ぎるなど脳内で自身の声が響く。

しかし、ふと思い起こす。自分は何を願つているのか、何をしたいと自分が思つているのか。

其処まで行つて、意識が体に戻つて行く。誘われる様にあげた視線の先で、直継とアカツキ、そして隣に座つているハサンがこともなさげに頷く。

「言え、シロ」

「シロエ殿の出番だ」

「任せた」

3人の言葉に背中を押され、シロエは決断する。目一杯風を受けた帆船のように言葉を口から吐き出す。

「僕らが行きます」

「えっ？」

予想していなかつた発言にマリエールとヘンリエッタは目を丸くする。其処に畳み掛けるように、シロエは告げる。

「僕たちが行くのがベストです」

「そんな！ シロ坊、うちらはそんな事ねだつてる訳や――――

マリエールの抗議を無視し、シロエは仲間たちに視線を巡らせる。

「モチのロンだぜ！」

「我等にお任せあれ」

「暗殺者とは依頼を完璧にこなす者だ」

完璧なタイミングで返答した3人の仲間。話は終わつたとばかりに全員立ち上がる。

そしてシロエはこれで最後とばかりに宣言した。

「明朝1番に出発する！ 任せておいて、マリ姐、ヘンリエッタさん！」

## 5殺目 空駆ける三騎

4頭の馬が草を食む。遠くを見渡せる丘の上で、心地良い風に吹かれて、青空から降り注ぐ陽射しを浴びて、さぞ幸福感に浸っている事だろう。しかし、そんなひと時はすぐに戦わりを告げる。

「ヒヒイイツ!!」

1匹は鳴き声を上げて突如走り出した。それに釣られる様に他の三頭も続いて鳴き声を上げて走り出し、そして森の中に消えていった。その様子を見ていた4人はふと疑問を覚えた。

「あの馬どこから来てるんだろうな?」

「さあ…………?」

アイテムで召喚した生物は何処からやってきて、何処に消えていくのか。ゲーム時代からの細やかな謎に対する疑問を言葉にしたのは直継、曖昧な声を漏らしたのはシロ工。ハサンとアカツキはすぐに考える事をやめてそれぞれの事に意識を向け始めた。

現在地はススキノへ出発して約半日の地点。途中では戦闘などは起こらず休憩も一

度のみだつたが、シロエが用意した地図と現在地を照合させた時に直継が「さっぱりだな」と言うくらい進んでいない。シロエの午後から飛ばすという発言で直継、ハサンは彼の発言で何かを察していたのをアカツキは感覚的に理解していた。その為、少しばかりの疎外感が心の内を占めていた。でも彼女は無理にそれを尋ねる気にはならなかつた。それは彼らを信頼しているからで、別に興味が無いわけではない。

(.....)  
「んつんつ..... プハツ」

喉に流している。

自身の獲物である窯変天目刀の柄を握つたり離したりしながら、悟られぬよう隣に座つたハサンに視線を向ける。ちょうど喉が乾いていたのか、ハサンは水筒を傾け水を

彼は戦闘時以外は骸の仮面をお祭りの面よろしく側頭部に引っ掛け、顔を晒していく。黄色人種らしい黒髪と肌色に青みがかつた瞳、少し威圧感をプラスする鋭い目尻、顔付きは大人っぽさはあるがまだまだ子供っぽさも見られる……そこまで考えてアカツキは恥ずかしさで胸が一杯になる。まるで子供っぽい容姿の自分が共感出来る存在を追い求める様な行動に思わず唇を噛む。

どうかしたか?

「つ…………いや、なんでもない」

「なんでもないって顔には見えないが?」

「うつ…………」

ハサンは水筒の蓋を閉めながら溜息をつく。

「別に無理やり話せなんて言わないが、悩みがあるなら言つてくれよ? 気になつて仕方ない」

立ち上がり伸びをするハサン。その際に暗殺者に見合わない厚めの鎧が力チャカチャと音を立てるが気にかける様子はなく、ポキポキと骨が鳴るたび心地良さそうに顔を綻ばせている。

「それに、悩む事はいい事だが程々にな。私は悩む度に師匠に叱られて、今じや悩むなんて自然にしなくなつた」

「師匠?」

「そつ、私の剣の師匠で今の俺を作つてくれた人だ」

『無駄な事は考えるな。己が身に任せて動け。そして誰の信じるお前でもない、お前自身の信じるお前らしさを振る舞え』

『悩む事もまた修行、されどそれに無駄な時間を割くでない。即断即決を心掛けよ』  
『感じろ、5感全てを研ぎ澄ましながらそれら全てを信頼するな。その先に、真に信頼できる第6感、第7感が目を覚ます』

『貴様、首を出せい。その根性を叩き直す』

『一步で足りなければ二歩三歩と前に踏み出せ。躊躇う事は許さん、その手が、足が、心が灰になり空に消え入るまで……いや、信じる全てがお前の眼前より消失するまで立ち続ける』

「まあ…………うん、すげえ理不尽を形にした人だつたよ」

「……………」

完全に目に生氣を感じない。懐かしいながら、はつきりと覚えているあの頃の自身の無我夢中ぶりある種感嘆すら覚えている、そんな目だ。よくもまあ此処までの無茶振りを真に受けて竹刀を、木刀を、真剣を振るい続けた物だと遠い目をする。その様子にアカツキはなんとも言えなくなつた。

「おーい！そろそろ出発するぞー！」

「…………よしつ、了解！」

直継の声が響き、ハサンの目に光が戻りいつも通りの様子に戻る。その変わり身の早さに驚きながらも、アカツキも出発の為に立ち上がる。そしてバックから一本の笛を取り出し口元に持つて行こうとする。それは馬を呼ぶ為の笛、冒険者には必須のアイテムだ。

「アカツキ、ちょっと待つて」

「ん? どうした、シロエ殿」

しかしあカツキが笛をくわえる前にシロエが声を持つて静止する。その行動に違和感を覚え怪訝そうな彼女の目の前で、彼は流麗な透し彫りの施された竹製の笛を取り出し、直継も同様のものを取り出す。しかしハサンはそれとは異なる、小さく無骨な角笛を取り出した。

「それはなんなのだ?」

小首を傾げて尋ねるアカツキに三者三様に微笑むとその笛を空高く響けと吹き鳴らす。吹き鳴らした笛の音色は絡み合い、荒地の風に乗つて大空に拡散して行つた。

「フウオオオオ!!」

「グオオオオオ!!」

鋭い鷲の咆哮と竜の叫び声が辺り一帯に響き渡る。そして重い羽音を響かせて飛来してくる3つの大きな影。まるで馬車の様な大きさのそれらは、シロエ達の頭上を大き

くふた回りして荒々しい勢いで着地し、その逞しい首を主人の足元に低く差し出した。

「グリフォンではないか！それに…………？」

彼らの元にやつてきたのは幻想種のグリフォン2体、そして幻想種の頂点と謳われる龍種の1体。しかしその龍の名をアカツキは知らない。

「グリフォンの呼び笛は、死靈<sup>ハデススブレス</sup>が原の大規模戦闘を切り抜けた者に与えられると聞いた事がある。だがそつちは…………」

巨大な獅子の体に鷲の頭部と羽、そして4足で歩く飛行生物グリフォン。戦闘能力は亞種や年齢にもよるが合成龍<sup>キマイラ</sup>に匹敵すると言う。しかしその隣にいるのは合成龍などではなく、それよりも遙かに格上であろう飛竜。

「その龍は一体…………」

かなり長くエルダー・テイルを遊んでいた彼女でもその名は口から出てこない。そんな中ハサンが口を開く。

「レイド参加条件を満たしていないプレイヤー救済用期間限定クエスト『龍の饗宴』。それをクリアした者に授与される報酬、碎けし伝説の龍笛」

肉をその龍の口に持つて行きながら、ハサンは話を続ける。

「それによつて、バハムートの幼竜を呼び出す事が出来る」

「そんなアイテムが…………」

バハムートとは、多くのゲームで強大な力を有する竜の一体である。本来の歴史ならばヒモスをアラビア語読みしたもので、決して竜に付いていた名前ではないのだが其処は今はいいだろう。

「まあ言うなら、このグリフォンのレイド未参加プレイヤー用かな?」

シロエがハサンの発言に付け足す様に話す。そして小声で「まあグリフォンよりもレア度もスペックも高いけど……」と言う。

「ちょうど死靈が原はリアルの都合で参加出来なかつたから、新装備のテストも兼ねて参加したんだ」

「あん時は驚いたのなんの。みんな暫く驚き過ぎて無言だつたしな」

直継がグリフオントとの交流を終えてハサンの側によつてこのこのとちよつかいを出す。対して、アカツキは驚きの意味が分からず、首を傾げる。それを見てシロエが説明を始めた。

「そのクエストはよく言われる防衛戦、タワーディフェンス系のクエストで運営側の設定したメチャクチャな難易度の所為でクリア者が1名しか上がらなかつた激ムズクエストだつたんだ」

それだけでアカツキは目を見開き、ハサンの方を見る。彼はそれ程でもないとなんでもなきげに振舞つているが、異常な事だ。それは無言になつて当然な話だ。

「まあ、俺達はグリフォン持つてたから参加しなかつたんだが、参加した奴らはこう言つてたよ」

直継はさも深刻な話をする様に一息置き、顔を強張らせる。あまりの変容ぶりに流石のアカツキもゴクリと唾を飲む。

「まるで地獄の宴だつたつてな」

地獄の宴、それがどんなものかアカツキには知らない。でもどんなものか想像は難しくない。

「ボス級こそ居ないものの、圧倒的物量と戦闘能力に多くのプレイヤーは攻略不可能だと匙を投げ、攻略サイトには悲痛のコメントが延々と綴られた」

なんだか、怪談話の様なシロエの語り口にアカツキの体が少し震える。

「その上、パーティープレイ可能だから他人との協力も可能。それなのにクリア出来ない程だからな」

「そんな中、その流れをぶち破るプレイヤーが現れた」

2人はハサンの方に向く。

「本来確率の低い即死を装備やアイテムによつて底上げ、そして圧倒的運でほぼ100%で即死を引き当て1人で防衛地点に立ち、何百という敵を奢る姿は正しく死そのもの」

「余りのことにゲームの管理者側からチートを疑われる始末。でも結果はそう言つた事実は一切無く、その余りの強さにこの件を知る奴等の一部はあいつの事を”歩み寄る死”なんて呼び方をしてたりする」

2人はハサンの事を称える。それが恥ずかしかつたのか、バハムートの幼竜に跨り3人を見下ろしながら急かす様な視線を送つてゐる。

『雑談はその程度で、早くしろ』

彼とてあの時のテンションは、リアルでの不調がゲーム内で振る舞いに影響を与えていたのだ。その為ある種黒歴史物であまりほじくられたくないのだ。

「アカツキは俺の後ろ。グリフオンよりこっちの方が安定するから」

ポンポンと自身の跨つてゐる鞍を叩く。しかしアカツキはバハムートの存在感に怯えているらしく距離を取つてゐる。しかし流石にそのままではいけない。既に直継とシロエは準備を終えて後はアカツキがバハムートに跨るのを待つてゐる。見兼ねたハサンはバハムートから降りてアカツキに近寄り、そして……背中と膝裏に手を差し入れ抱え上げる。

「なつ、何を!？」

「このまま時間を浪費するのもアレだからな。…………文句は後で聞く」

世に言うお姫様抱っこを躊躇なくするハサン。これも彼の師匠の教育（異常）の賜物

か、余りにも自然かつ流れる様な動きにアカツキはもがく事も出来ずにただ顔を赤くするしかない。そのまま迅速にバハムートの背中に飛び乗り、自身の後ろにアカツキを座らせる。

「小太刀の鞘はいつもよりしつかりベルトに固定、背負い袋もな。風に流されるものは畳むようにな」

「うつ、うむ」

未だに顔が赤みがかつたアカツキに飛行の為の準備を促しながら手綱を握つてバハムートを立たせる。そして立ち上ると分かるグリフォンとの縦の高さの差。流石はバハムートの幼竜と言つたところである。付け加えて言うならこれまで幼竜、しかもプレイヤーを主人として認める設定がある以上生まれて間もない個体。それでグリフォンのスペックを上回つているのだからバハムートとはとんでもない生き物である。

「しつかり掴んでくれよ。安定性は高そうだが、上空は風は強いからな」

「問題ない……事もない」

もぞもぞと身体を揺らすアカツキ。どうも馬術の方は冒険者の身体に刻まれた感覚でなんとかなる様だが、竜種の騎乗はどうもうまくいかないらしい。そこでハサンはアカツキを気遣い自分の腰あたりを軽く叩きながら告げる。

「もう少し腰を落ち着かせて、後俺の事掴んでくれ。怖いならしつかり掴んでくれて大

「丈夫だから」

「あつ、ああ……」

アカツキの顔の赤みが更に濃くなる。ハサンの女性に対する献身的な対応に甘える様に、彼の腹部に手を回す。その際の普通ならこそばゆくなる様な掴み所を探す手の動きにもこそばがらずに飛んで行く方角の空を見据えている。

「じゃあ先に行くぜ！」

「行くよつ」

2人が手綱を振るうとグリフォンが翼をはためかせ空の彼方に飛んで行く。それを見据えるバハムートの幼竜の鱗をそつと撫でて、ハサンは手綱を構える。

「さて、行くぞ！」

「つ！」

身体中に風が叩きつけられる。身体が何倍も重くなりバハムートの背中から落とされそうになるのをハサンの背中に抱きつく事で耐える。そしてしつかりと鍛えられた程良い硬さを持つハサンの逞しい背中に周囲を見ない様に顔を埋めるアカツキだったが、しばらく経つて、漸く周囲を見渡す余裕が生まれる。そして周囲を見渡すと同時に感嘆の声を漏らす。

「良い景色だな」

自分にしがみつくアカツキが少し余裕を持ててている事に安心したハサンは彼女に声を掛ける。自分の肩迄くらいしか身長のない彼女が飛んで行つたりしないか内心で心配していたが、問題なかつた事に1つ息をつく。

「大丈夫か？」

「うん——これは、凄いな。青空の中に浮かんでいるみたいだ」

確かにと微笑む。轟々と唸りを上げて後方に千切れ、押し流されて行く風。今は翼を広げて滑空する様に空を移動しているのにも関わらず、上昇気流を生かして高度を維持しながら先に出ていたシロエと直継のグリフロンに並ぶ。

「どうだスゲエだろ！」

「そうだな！」

直継の声が弾んでいる。純粹に空を飛んでいる事への興奮を表すそれにハサンも声を弾ませて返答する。シロエも声に出さないながら唇の端が上がつていて。そんな彼らに、アカツキもつられる様にして花の開いた様な笑顔を向けて告げた。

「すごい。空の碧さが透き通るみたいだ」  
ハサンはそんな彼女を見て、先程の純粹な子供の様な表情ではない穏やかな表情でアカツキに笑いかけた。

そのまま、空を駆ける三騎の姿は北へ向かつていつた。

## 6殺目

## パルムの深き場所にて

??

彼は気配を断つ。呼気を限りなく小さくする。目を細め闇に溶け入ることを意識下に置き、全てと一体化する様に歩き続ける。彼の横を人型の鼠が群れで通りすがる。彼等は彼に気付かない。誰として彼を知覚できない。いなくなる一団を確認し、彼は再び歩き始める。そして入りくねる迷宮の十字路に着く。

??

ミスト・シティ  
霧の都

??

スキルを使い周囲を霧で満たす。視界は水蒸気によつて覆われ、自身あまり見えているわけではない。しかしまるで周囲の地形を理解しているかの様に十字路を右に曲がり、そこに鼠人間<sup>ラットマン</sup>3体が立つてゐる事を確認する。

??（アカツキの調べ通りだな）??

小さな忍びの前調べを称えつつ、彼は剣を引き抜きうちの一體に狙いを付ける。

?? →死の一閃→??

首を跳ね飛ばす。鳴き声を上げられない程の鋭さを有する一閃に首を切り離されても体は未だに消えない。それによつて他の2体は死神が間近にいる事に気付かない。

?? →死の一閃→

?? 短いリキヤストが終わり、再び放たれる一撃。今度は胴を捉えたその一撃にラットマンの体力が消し飛ぶ。そして2体分の身体が同時に消滅した音で、残されたラットマンは漸く側に居た2体が居なくなつた事に気づく。それでもラットマンに彼は見えていい。圧倒的恐怖を振りまく存在が真横にいるにも関わらず決して気づく事がない。それは彼の持つサブ職業、死神によつて得られる『消命』という常時発動系スキルのお陰である。

??? 消命とはゲーム内効果で戦闘時に相手のヘイトが向きにくくするスキルだ。しかし、現実になつたこの世界では彼の様にコツを掴んだ者が使用すれば、それこそ堂々視界に映りに行かない限り気づかれない程のステルス能力と変化する。

?? ～ 核穿ち～ ??

逃げ出そうとする最後の一體の背後から容赦なく剣を突き出し貫く。即死が決まり、ラットマンは消滅した。それを確認すると役割を終えた男は剣をしまい元来た道を戻る。最後の最後まで気を抜かず消命を維持し、仲間達が待つて居るキャンプ地へと戻った。

◇  
????

「今戻った」 ??

ハサンがキャンプ地へ戻つて来たのはシロエがマリエールへの途中報告を終えて、耳元から手を退けた時だつた。直繼はしけたツラで塩で味付けしたサンドウイッチを食し、アカツキは蜜柑を剥いて口に入れている。 ??

「おかれり、どうだつた？」 ??

「ああ、排除しておいた。逃しもしなかつたし、この先から此処まで安全だろう」 ??  
ハサンはシロエの持つて居る地図上に指を這わせて自身が向かつたポイントを示す。

それはこれから通るルート、中でも曲がり角などで視界に優れない場所。目的はこれら移動するに当たつての強襲の防止である。????

ラットマン、一体一体は弱いが鼠の如し繁殖力で1つの群れの頭数は数十から百を超える。その上バットステータスである疫病を振りまく厄介な連中だ。その上人型な分知能が発達していく狡猾でずる賢く、奇襲なども得意とする。4人のレベルがレベルなだけ有つて正面からの戦闘は今の所発生していないが、待ち伏せしているラットマンも先程ハサンが倒した連中の様に存在するのだ。

「それにしても、シロエ殿は地図を描くのが得意なのだな」

ハサンの成果を地図に書き込んでいくシロエの様子を見ながら、アカツキは感心する様に言う。

「C A Dみたいなもんだよ。僕はサブが筆写師だしね」

「C A Dとはなんだ？」

「パソコンでやる製図。大学でやるんだよ、工学部だし」

「シロエ殿は大学生なのか？」

シロエは頷き、もうすぐ卒業だつたと付け足す。ハサンも直繼もそれぞれ現実での事が頭を掠める。

「そうか。では私とは殆ど同じ歳なんだな」

一瞬の静寂。シロエと直繼は完全に硬直しており、衝撃の事実に震えている。ハサンは「あゝあ」とでも言いたげな目で男2人を冷たく見る。

「えっ!?

「まじかよつ!?

ほぼ同時にツッコミが入った。

「そんなに意外か?」

アカツキは落ち着いているハサンに視線を向ける。彼は分かつて当然だとばかりに笑い掛ける。

「冗談だろ、ちみっこ。だつて、ちみっこ身長ないじやふぎやつ!?

言葉を叩き潰す様な鋭い飛び膝蹴りが顔面に突き刺さる。痛そう（小並感）

「主君、バカ直繼を蹴つてもよいだろうか?」

「だからそういうのは事前に断り入れろよ!」

「だいたいバカ直繼は身長の事をあげつらいすぎだ」

「胸のサイズはさらに壊滅的じやゴギヤつ!?

2人の漫才はそれとして、シロエは内心冷や汗をかいていた。直繼の様に直接口にはしないものの、身長が小さいが為に年下と認識していた節があるからだ。

「ハサンは、気づいてたの？」

「ああ、正確にじやあないけどな。20歳は超えてると思つてたよ。振る舞い方が子供っぽくなかったし、観察眼には自信あるしな」

2人の漫才じみたやり取りにクククと笑うハサンはそう言いながら自分の目を指差す。

「！ 子供……か」

対してシロエの表情に陰りが出来る。子供というキーワードからハサンは1つ心当たりにぶち当たる。

「あの双子か？」

「！ ……うん」

ゲーム時代に2人が先生がわりをしていた2人の初心者プレイヤー。姉弟の双子で色々な場所を冒険した仲である。証拠として大災害直前まで2人は双子と一緒に居た。アキバの街に引き戻された際に逸れてしまい、その後もこちらの生活に適応すべく忙しくしていた所為で出会う事は出来なかつた。シロエはどこかのギルドに入るのを見た  
という。

「なんか……胸騒ぎがする」

ハサンの真剣な顔を見て、シロエは確信めいた物を感じる。彼の予想は必ず当たる、

そんな気がしてくる。寧ろ、今回の様な悪い事は外れて欲しい、でも彼は胸騒ぎがする  
と……不安があると言つた。つまりは、その内自分達も何らかの形でその渦に巻き込まれるのだろうと  
いう推測がシロエの中で生まれる。ハサンも顔をしかめる。

「主君、どうかしたのか？」

「えつ？」

??ハサンが振り返ると岩の上に立つたアカツキと目が合う。ただし、それだけではない。  
少しでもどちらかが顔を前に動かしたら唇が触れ合いそうな近距離で見つめ合う。  
「すつ、すまない！」

「えつ……あつ、うん」

あまりに急な出来事に呆然とするハサンと顔を真つ赤にするアカツキ。それに顔をニヤつかせる直継と先程の暗い顔から苦笑に変わるシロエ。さつきまでシロエとハサン、2人の間に流れていたものとは違うピンク色めいた空間が広がつていた。

その後直継の顔面に飛び膝蹴りが飛んだのは言うまでもない。

## 7 殺目 要と いう 存在

「しくじったか…………」

崩れ出す石橋。石橋を叩いて渡るという諺があるが、それを欠いた結果の現状にハサンは激しく憤り、自身の警戒の甘さを痛感させられる。周囲同様の劣化具合と考えれば事態が起ころる前に対応出来ていたと自傷する。

「主君！」

身を乗り出し助けようとするアカツキの手を払い、重力に身を任せた。彼女と自分では体格差がありすぎ、もしも引っ張れば彼女もろとも落ちてしまうと考えた結果である。

「主君、主君——!!」

なおも名を呼んでくれる小さな連れ人の気遣いに感謝しながら落下し続ける自身の体に意識を戻す。既に落下開始から3秒が経ち、地球の重力加速度と同じなら既に88m落下している。そして4秒、5秒と経過して6秒目に達するといったタイミングで水中に叩き込まれた。

(くそつ……)

今はこの無駄に頑丈な肉体が恨めしくなる。下が水だとは思わず即死と侮っていた分、空気を蓄え切れず息苦しさが残る。鎧の所為で体は浮き上がらない。案外浅い様で背中が底に着き、床の硬さを感じる。

(こんな……所で……)

生存の確率が微かに残つた状況、人は諦めがつかなくなる。それはハサンも同様だ。仕方がない、彼はそんな妥協を拒む。何とかしなければならない、そう考え何とか方法はないかと脳を必死に動かす。しかし次第に酸素を求める体が口を開け体内に蓄えていた空気を吐き出し新たな空気を欲する。同時に急速に意識が体を離れて行く感覚に襲われる。

(死んで、たまるか……)

意識が断ち消える間際、彼は手を伸ばす。そして



霧ヶ峰  
かりがみね  
要  
かなめ

現実において要の両親は彼が幼い時に他界している。別に殺害された訳でも心中した訳でもない。母は体力がなく、無理に子を成した負担で要を産んでから直ぐに死去、

父親は母が死んだ後の不摂生な生活が祟つて病で床に伏せ息を引き取った。

彼にとつて死とは身近な物だ。恐怖する事でも忌み嫌う事もない。自身もやがて死ぬ、それを元気に生きている今氣にしてどうするのだと、まだ年端もいかない年齢で理解していた。

彼を引き取った男はゲーム好きの叔父で、それが彼にオンラインゲームのエルダーテイルを触れさせるキッカケを作つた。そして、叔父の親族が運営している剣道場での出会いが彼の運命を大きく変えた。

その男の存在が、要の手を引いた。傷つく事を恐れない、決して曲がらない、目に見える善悪で物事を語ろうとはしない、今の要を作り出した。そして彼の中に眠る才能の扉を蹴破り、剣の達人へと変えていった。言う事やる事は無茶苦茶だったが、結果的に要は今の人格を形成したのだから結果オーライと言えなくもない状況にある。

彼は感謝している。この世全て、不謹慎ながらも自身の両親の死すらも運命だつたのだと諦め、感謝している。恐らく両親といたならまた異なる自身が生まれていた事だろう

う。今以上に何もかも足りなかつただろう。そう思うと万物に感謝の念が湧いてくる。自身を作る全てが彼にとつて感謝の対象である。



「主君！ 主君！」

アカツキが肩を揺さぶりながら必死にハサンを目覚めさせようとする。しかし、彼は一向に目を覚まさない。体力の減少は水面に叩きつけられた際の少量のダメージ程度でそれ以外に異常はない。しかし、一向に目を開けないハサンにアカツキの表情はドンドンと焦りで滲んでいく。

「大丈夫だよ、アカツキさん」

「きつと気を失つてるだけさ。それに呼吸の乱れもないみたいだしな」「しかしつ！」

ひどく落ち着いたシロエと直繼に声を荒げるアカツキ。最も彼らとて内心は振る舞いほど穏やかな物ではないが、ハサンという存在に対する信頼という物の厚みがアカツキとは大きく違う。それに彼らはアカツキを気遣つているのだ。

「つ！」

しかしそんな事、言われずして理解する事は難しい。何も出来ない自分が不甲斐なくて仕方ない、唇を噛み締めるアカツキの顔は悲痛で歪む。

「うつ……グツ……」

「つ！ 主君！」

その時、漸くハサンは目を覚ます。アカツキの顔が嬉しさから明るくなり、シロエと直繼もほつと息をつく。

「大丈夫か？」

「ああ、水面に叩きつけられて少し気分が悪いけど……」

いや、それだけではない。彼の中に違和感が渦巻いていた。先程まで見ていた夢、それの中で感じた新たな輝き。そしてそれは、今の彼を足りなかつた物を授けている。

「心配掛けて御免。先を急ごう」

何ともなさげに、ハサンは立ち上がりシロエ達の方へと歩いていく。アカツキは休む様に言おうとして、口を閉ざした。何を言つても、絶対にハサンは自身の意思を押し通してしまう。そう、理解したからだ。

「主君……」ギュッ

「アカツキ……」

アカツキはハサンの鎧の布部分を掴む。それだけで、ハサンは何となくではあるが彼

女の気持ちを感じ取る。

「安心してくれ」

ハサンは穏やかな表情で彼女の肩に手を置き、宥める。

「無茶はするけど、無理はしないさ」

嘘だ、ハサンは無茶も無理も平然とする。それも、他人の事となると尚更だ。

「さあ、行こう」

彼は歩き出す。その背中を見たアカツキは目を丸くする。ただでさえ逞しく思えた背中が、更に大きくなっている。そして、何処かで見た様な既視感が、彼女の中にシコリを残すのであった。

## 8殺目　ススキノ大脱出

エツゾの帝国、旧世界の札幌に相当する地域でその一部にススキノの市街地が存在する。多くのN P Cが暮らす農業地域を含む城塞都市、というのがススキノがゲームだった頃の設定である。現にゲートに通じる道以外、周囲を森が覆っている。

その森の中ひつそりと息をひそめる男が1人。そう、ハサン＝サツバ一ハである。

彼はシロエから緊急時の切り札として、外での待機を言い渡されたのだ。セララの出迎えはシロエと直継、アカツキの3名。ハサンはリスト地点更新の為に一度街に入つたのち消滅で姿をくらまし街を出て、脱出に使用する出口側の森に隠れている。

（退屈だな）

冒険者の肉体のおかげか、体は暖かい。北海道の寒さに負けるような事はない。しかし、手持ち無沙汰で退屈なのは事実である。体を動かしたくても隠れる都合上音を出してはいけない。その為動く事ができない。

(んっ?)

そのまま少しどんやりと雲で覆われた空を見上げているとゲートから大勢の冒険者が出てきた。神輿に乗った男と、他の冒険者とは違う灰色のローブを纏つた男にハサンの意識が向かう。

(あいつは確か……)

何処かで見たことがある気がしたハサンは、顔の造形でゲーム時代の頃のキャラを推測する。そして、そうだそだと答えに至る。

(デミカスに灰鋼のロンダーグか……)

ハサンは明らかに嫌そうな顔をする。デミカス(デミクアス)という男とロンダーグという男に、彼は心当たりがあつた。ゲーム時代から無軌道な行動が目に余っていた問題。プレイヤーの武闘家、デミクアスと火蜥蜴の洞窟で手に入る秘宝級のローブを纏つた二つ名持ちの妖術師、ロンダーグ。まさか、馴れ合いを嫌うデミクアスとロンダーグが組むとは思つていなかつたのか、ハサンは少し頭を捻る。

(これは、出番が来そうかな……)

出来れば自分が出なくとも良い状況なら良かつたのだが、2人以外にも大勢にデミクアスの配下らしき冒険者が堂々と待ち伏せを開始する。そんな隙だらけの背中に今すぐにでも不意打ちをかましたくて、手がウズウズするハサン。痒いところに手が届か

ない時の表情である。

(なんなら今すぐ大立ち回りを……いや)

少し考えて辞める。今のハサンなら別に十数人程度の冒険者はなんともない。しかし、無駄に暴れて、(害悪プレイヤーとはいえ)無差別に殺すのは流石に躊躇われる。それに、味方が街の方より現れた。

人数は3人。うち背が低い赤っぽい髪の少女がセララだとハサンは直ぐに理解したが、シロエの横を歩く猫人の姿に目を見開き硬直した。

(マジかよ……)

其処には放蕩者の茶会時代から交友のある盜剣士の猫人族、にやん太が居た。あまりの展開に完全に思考が停止、シロエとデミクアスのやり取りは耳に入らなくなる。

ドオオーー!!

「?」

大地を捲る様な轟音で止まつた思考が動き出す。どうやらデミクアスとにやん太、2人の一騎打ちが始まつた様で、空気を裂く様な豪腕がにやん太に迫る。それをにやん太は得物のレイピアで可能な限り逸らしてダメージを抑える。そしてお返しとばかりに

盗劍士特有のデバフを付与する剣撃がデミクアスの四肢へと放っている。

『もしもし、ハサン？』

「！ もしもし？」

念話がシロエとハサンを繋ぐ。そしてハサンに指示が飛んだ。  
『恐らくデミクアスは業を煮やして一斉攻撃を仕掛けるはずだ。その足止めを頼める  
？』

「ああ、とっくに準備は出来てる」

ハサンの力強い承諾にシロエはうんと頷き念話を切る。そして来たる時が来た。

「くそつ！ しゃらくせえ。ヒーラー、俺の手足を回復しろ！ 暗殺者部隊！ この猫野郎を  
ぶち殺せ！」

とうとう怒りが限界点に達したのか、声を張り上げ指示を飛ばすデミクアス。その怒  
声が生んだ一瞬の隙に彼らの内心が公になつていて。

しかし、秤にかけたのだろう。悪行に手を染めススキノで暮らすか悪行から逃げて宛  
もなく彷徨うか、どちらが優先されるべきか彼らは吟味し剣を握りしめる。答えは決  
まつた、それならば善なす者もそれに応えなければならぬ。

「アンカーハウル！」

「死者の叫び！」  
ヒスティリック・シャウト

左右の茂みから直継とハサンが飛び出し、8名の暗殺者部隊を半分に分担、それぞれにタゲ集中を放ち動きを封じ込める。突然の乱入者に各員動きを止める中、ハサンは剣を向けて告げる。

「さあ、貴様らの罪を数えろ」

そして、戦いの火蓋は切つて落とされた。



策士シロエが出した真正面からリーダー格を倒してのススキノ脱出という案にセララは困惑していた。側にいたにやん太とシロエ、そして話だけ聞いた直継、ハサン、そしてアカツキの5名。幾ら高レベルでもブリガンディアの数十人を相手取るのは不可能だと考えていた。

しかし彼女は真に理解していない。自身を救いに来た一団の戦闘能力、その高さに。

「おらつ！」

直継がタゲ集中の特技を用いながら敵をその場に留めさせ、攻撃を盾で受け止め凌

ぎ続いている。4人の攻撃を諸共せず、懸命に後衛を護ろうとする直継を彼女は凄いと感じた。

「おいなんだよ此奴！」

「化け物がアアアアア！！」

「くそつ！くそつ!!」

「さつさとくたばれえ！」

しかし、暗殺者は別だ。防御が薄い暗殺者が盾役を担うケースはまず無い。あつたとしてもそれは盾役無しでの場合が殆どだ。だがその常識は目の前で覆されている。ハサンは躱す、躱す躱す躱す。攻撃がまるで見えているかの様に躱し続ける。

その姿に彼女は背筋が凍る様な感覚に襲われていた。刃に臆する事なく、スレスレを躱すハサンの動きに自分を重ねて顔を青くする。自分ではあんな事出来ない、そう理解し考える事を辞める。

「にやん太班長と直継に連続ヒール！」

「はっ、はい!!」

そして彼女は彼女の出来る事に意識を集中させ始めた。その活躍が少なからずこの戦いに貢献した事は言うまでも無い。



(嗚呼、なんと平穏な事か)

そんなトチ狂つたような事をハサンは考えていた。4人に武器と殺意を向けられて如何すれば平然と居られようか?いや、居られる訳がない。

シロ工達は冒険者でこそあるが元々は一般人、それも敵意や殺意に免疫があるとは到底思えないような生活をしている。今立つていらっしゃるのも守るべき存在、守つてくれる存在がいるのが大きい。

しかしハサンだけはその例から浮いている。何故なら彼は現実でこれ以上の殺意を体験しているからだ。1ミリでも動けば、それこそ身震い一つししよう物なら首が飛ぶと錯覚する様な恐怖。剣を見るだけで全身が刻まれるような予感。師匠を仰いだ者から向けられたそれらに適応すべく彼はひたすらに鍛錬を続けた。

第六感を手にして攻撃の4割を躱せる様になつた。しかしそれでは後の6割を躱せ

ない。上へ、上へと望んだ……その結果が第七感の習得である。

死視感、死を見る感性。それは決して相手の死期を見るものでもなければ、死を齎す不思議な線と点を見る訳ではない。それはただ、攻撃を先に読み可視化する能力。死をもたらす敵意や殺意の籠つた攻撃の軌跡を赤黒い物として見切る程度の能力。

彼の師匠は「まだまだだな……」と言っているが、常人なら不可能な領域にハサンは片足を突っ込んでいる。

「何つ!?

四方を囲み、ひたすらに攻撃を繰り返している暗殺者達から驚愕の声が漏れる。何故なら彼は背後からの攻撃を、まるで見ているかの様に完璧に躱しているのだから。まあ、彼からすれば手綱すぎて欠伸が漏れていたが……。

「もう動くな」

「ショックブレード」

「「「!?!」」

4人の動きが止まる。少量のダメージと共にそれぞれのステータスに数秒間の行動不能が付与される。普段でも有用性の高いその技だが、その数秒が勝負を完全に分け

た。その数秒内にやん太はデミクアスを倒し、アカツキがロンダーグを背後から一撃。

指揮系統を失った雑兵など恐れる事なし。そう言わんばかりに放蕩者の茶会の面々は召喚笛を吹き鳴らし、グリフォンとバハムートの幼竜を呼び出し南の空へと飛んだ。

## 9殺目 弟子

にやん太とセララは困惑していた。

ススキノを離れ、海峡を飛び越え、日が暮れる頃に野営の準備を始めた遠征組。役割を決めて、にやん太とセララのススキノ組は薪集め、シロエらアキバ組はテントの設営を担う事となっていた。

それで森の中に入つたにやん太とセララ。冒険者の優れた運動能力を活かしてある程度薪を瞬時に集め、さあ戻ろうというところでセララが発見したとあるもの。それが2人に冒頭のような感情を齎した。

其処に倒れているのは人。それもこの世界に似合わない紺色ジャージに短パン。ジャージの所為で上半身は余り分からないが、短パンから伸びるスラリとした足は同性のセララが思わず喉を鳴らす程。頭にキャップを被り後頭部から金髪ボニーテールが

覗いている。

「さてはて、どうしますかにや～？」

顎をスリスリしながら暢気なことを口にするにやん太。しかし別に助けたくない訳ではなく、セララの自主性を育てるべくわざと言っているのだ。彼は普段から心優しく、他人を助ける大人な余裕を持つている。

「助けましょ～！」

慌てて駆けていくセララを目を細めながら嬉しげに眺めるにやん太。そして次の瞬間に聞こえて来るであろう言葉を思うといつも以上に口角が上がるのを自覚する。

「大丈夫ですか!?」

「うう～…………」

セララが女性を抱き起こすとその顔の細り方は尋常ではなかつた。誇張された様な、漫画などで見られるやつれきつて干からびた細顔。そして同時に鳴るお腹の音。セララは目を丸くしており、にやん太に至つては声を上げて「にやはははつ」と笑つている。

「お腹、すいた…………」

セララは思わずつこけそうになつたのであつた。



「アカツキ」

「これだな、主君」

「ん」

ハサンは領き、アカツキから金槌を受け取り杭を叩く。キンキンと金属の打ち合う音が山の中に響く。

「アカツキ」

「ここか？」

「そうそう、しつかり押さえておいて」

今度はアカツキが天幕用の布の端を引っ張つて余裕を持たせ、ハサンがその端に付いた二本の紐を持つて杭に結びつける。そうする事で幕が地面にしつかりと固定される。

その様子を見ていたシロエと直継は表情は苦笑を浮かべつつ、内心ではウズウズしていた。まるで初心な友人をからかいたくなる様な、そんな感情がふつふつと湧いて来

る。

ハサンとアカツキは口に出す事なく必要としている物を理解している。当然選択肢が少ない分だけ分かりやすくはあるが、それでも数週間程度しか旅をしていないというのに素晴らしい連携である。現に1人でするより3倍近い効率で進んでいる。

2人はアカツキがハサンにほの字な事を当然把握している。それに、文句をつける気など全くなない。彼女くらいの年齢の女性が恋に生きる気持ちも理解出来るし、自分達が彼女の立場で異性に手を差し伸べられたらキュンとする気持ちも分かる。

しかしそれとからかう事は別である。自分達の前でイチャイチャされると口の中が甘つたるくて仕方がないし、壁を殴りたくもなる。その解消法として当事者をからかう事を誰が責めるだろうか？いや、ない（反語）。それにアカツキのような生真面目少女をからかうのは面白そうだという邪の考えも微かの存在している。

「ふう…………これでオーケーかな？」

「ああ、バツチリだ主君」

グツグツと布や紐の張り具合を確認し、2人ともグーサインで合図。既に小テントの

方を張り終えたシロエ達の所に歩み寄る。

「お疲れ様……」

「お疲れ～……」

椅子代わりの岩に腰掛けるシロエと直継。その表情はどこか暗い。その表情に何事かとハサンは思考し、その表情の意味を理解した。

「…………飯か」

「ああ…………」

「皆さーん！」  
「少しこちらに来るにや」  
絶望し切つた顔の直継と同情するように肩をぽんぽんするハサン。シロエもアカツキも大袈裟だと言いたげだつたが、否定出来ないのか声には出さなかつた。

セララとにやん太の声が聞こえて来る。同時に漂つて来る、香草と肉の脂が焼ける表し難い極上の香りに肉の焼ける音。鼻を大ばりにヒクつかせ、耳をこれでもかと研ぎ澄まし、歩き出す。その動きが亡者のようにトロトロした動きから駆け足に変わるのはそう掛からなかつた。

「おお～!?」

「これは～っ！」

焚き火のそばで焼かれた串焼肉。それだけで3名の意識は全てそこに持つていかれる。しかしハサンだけは既にそこに座して必死に肉を食らう金髪少女に視線を奪われる。別に惚れたとかそういう理由ではない。

「…………!?」

嘘だろ?という言葉も出ない程驚愕している。

「主君?」

既に焚き火の側に腰を下ろすシロエと直継とは対照的にアカツキは主人であるハサンが固まっている事に気付き手を引く。しかし一步として動かない。

「あれ?君は?」

「そういやお前誰だ?」

「へつ?……………!?」

今更その少女の存在に気づいた2人は揃って疑問を投げかける。それに対してもガツガツ食っていた少女は漸く新たにやつてきた4名の存在に気付き、そしてその中の1人を見た瞬間、目が驚愕の色に染まる。

「しつ、師しよぶううう!?」

「「「ええええええつ!?!」」」

気づけば金髪少女の側にハサンは立つており、何か言おうとした彼女の脳天に全力の

拳骨を落とした。痛そう、そんな小学生並みの感想は誰も浮かばなかつた。冒險者の腕力は馬鹿みたいに高い。全力で殴るとか何考えてんだと言いたくなる。もしもこれが平穩パートギヤクで無ければダメージで即死なんて笑えない事になつていていたかも知れない。

「何やってんだ、馬鹿弟子？」

「「「弟子！」」」

「ほほーっ」

4人の声がこだまする。ただ1人にやん太の納得するような咳きが妙に浮いて聞こえた。

# 10殺目 歪んだ世界

すっかり日は山に隠れ、明かりは目の前で燃える焚き火のみ。お陰で空の星がはつきりと目視できる。

「へエ～、お前も巻き込まれてたのか」

「はつ、はい！」

ハサンと金髪美少女ヒロインX、2人の間に流れていた先程までの険悪なムードはそこに存在せず、其処には先輩と後輩の様な上下の力関係が見られるやり取りが繰り広げられていた。口調は普段より碎けた印象で二人がどういう関係なのか、興味が唆られる。

しかし、シロエら3人はその事にまるで口を挟まない。彼らは現在、絶賛大興奮中で誰の言葉も耳に届いていない様な状態だ。食が人に与える力は此処まで大きい物なのかと、ハサンは感情表現が下手くそな付与術師に目を向ける。其処には興奮し切つて暴れる感情を必死に抑え込み、しつかりと焼かれた鹿肉を勢い良く頬張るシロエの姿があつた。

塩コショウ、ローズマリーで調味されたそれは決して高級料理屋の上品な料理ではない、ワイルド身に溢れた物だ。でも、それでも美味しいものは美味しい。

実際ハサンも先程まで感情を爆発させて馬鹿食いしていた。しかしある程度で手を止めて、みんなが落ち着くまでの間ヒロインXと談笑しているのだ。

「しかし、その装備は……」

「しつ、仕方ないじゃないですか！前まで使つてた装備が性能不足だつたのでこれに変えただけです！別にジャージ好きな貴方の為に変えたわけじゃありませんから！」

「いや、別にジャージ好きじゃねえし。てか、あの騎士王装備よりほんのちよつびり性能上がつただけだろ？割とネタ装備だし、しかも聖剣に対する補正もなくな」

「ええい、煩いですね！私が納得してるからいいんです！というか貴方が納得すればそれでいいんです！」

顔を赤くしてプイと顔を逸らすヒロインXに思わず呆れるハサン。一体どこからジャージ好きなどという噂が広がったのか、頭を抱える。これまでの人生でそんな事を公言した事は一度もない。精々部活中に部員の管理として一人一人身嗜みを確認していくくらいしか覚えがない。

「いや、俺が納得してるなら良いいってなんだよ」

「あつ、それはその……」

Xの耳にリンゴの様な赤みが差す。言い負かされている気がして、負けず嫌いで言い返したらこれである。つくづく彼女は自爆属性持ちらしい。

「道場の倒すべき宿敵<sup>なまか</sup>が教えてくれたんです！ 貴方がジャージの女子に何度も視線を向けていたと！」

「…………あいつか」

彼女としょっちゅう争っている白髪の彼女を思い出す。今ではあの妙に高いテンションと面倒い絡みすらも愛おしく思える程に懐かしさを感じる。それと同時に次会つたら竹刀で無明三段突きをかましてやろうと決意する。それと同時進行で金髪アサセイバーに対する処罰も考えておく事にした。

「別に故意的に向けてたんじゃねえよ。単に部長として部員の様子を観察してただけだ」

「かつ、観察!? 変態ですか貴方は!？」

「おいなんだその反応は…………。体調不良とかサボりの奴が居ないか観察してただけだ。変な事考えんな馬鹿」

「馬鹿とは何ですか馬鹿とは！ そつそれに、へつ変な事なんて考えてませんしい！？ 貴方

こそ変な事つて何の事ですかねえ？』

「なら、お前の言つていた観察の意味も教えてもらおうか？あんな異常な動搖の仕方して、変態とまで罵つたんだ。何もありません、は通じないからな」

ウウウウウウ

顔を真っ赤にして俯くヒロインXとそれを見ながら悪い笑みを浮かべるハサン。その様子をセララは苦笑いで、にやん太は微笑ましげに眺めていた。



狐の女性は暗闇の中で上を見る。慣れ切つた視界に映るボロボロの天井、床にはコンクリートで時期に似合わず真冬の様にひんやりと冷たい。そこから得られる冷たさによる痛みが彼女の正気を無意味に保ち続ける。いつそ狂えたらどれだけ楽かと、女性はぼんやりと考え、そしていい時間潰しだと頭で堂々巡りを繰り返せる。

決まり切っている内面での答えを押し殺し、無理やり思考を長引かせる。そうする事でしか、彼女は時間を使えない。軟禁された現状で、不足している娯楽で、時間を使えるほど出来た人間ではない。

ドアが開き、声がする。それと同時に乱雑に置かれた食事。見た目は豪勢だ。見た目は魚の造りやお吸物、でも中身は違う。まるで味のない水でふやかした煎餅、それには温もりも籠っていない。相手を思いやる気持ちも、食べて欲しいと言う願いも籠っていない。そこにあるのは唯”生かす”為だけに用意された物。

女性はそれに口をつけない。代わりにバックから密かに忍ばせていた果実を取り出し口に含む。弾け出る果汁、しかし女性は好ましい反応を示さない。

死んでも蘇るこの世界で死ぬ事は生きる事より容易い。町の外には魔物がうろついている。どれだけレベル差があろうとも時間さえあれば容易く死ねる。でもそれは逃げに過ぎない。現状を受け入れず逃避するしかない弱者。彼女は余程、墮ちたくないのだろう。

フレンドリスト最上段、今も白い輝きを放つ文字が彼女の支えとなっている。



語り手は笑う。

「これは愉快だ」と……。

誰がこのような事を想像しようか。悪が悪でなくなつたらこの世界は何が悪になるのかと、善が善でありすぎたが故に世界の歯車はどれよりも早く回つてゐるのだと。他の物と異なる手順で回る物語最短の道筋。ルート。

その観察対象は世界ではなく個人を救う。それが世界の歯車を抜き取り、はじめ直し、最短の道筋に変えている事を神は知らず理解も出来ない。神は万物を超えた存在でありながらその下にいる物を塊としてしか見ず、個として認知しない。つまり大まかな括りとして人の行動を把握しているだけに過ぎず、個々の技量や力量を測る技能は人には劣る。

それに追い打ちをかけるように観察対象の行動だ。対価交換を求める事が基本とされる人間社会において、利益を自身の中で生成し他者を救済する。その行動は神からすれば異常な事なのだ。その上対象が神々からすれば**世界派生駒**娯楽に用いる優秀な役者だったのだ。

「下らない」と嗤う。

神々が手ずから生み出したならいざ知らず、自身が生み出した世界から生まれた存在を駒にして遊ぶような真似を語り手は憤りながらも嗤つた。

## 進展の第二章

### 11殺目 彼の居ないアキバ

シロエが引きいるセララ救助隊が、アキバに戻つて既に数日が経過した。

にやん太が発見した味のする料理は三日月同盟の屋台『クレセントムーン』にて販売が行われアキバの街に賑わいと活力を与え始めた。

その為に、アカツキとヒロインXはクレセントムーンの店員として働いた上でヘンリエッタに弄くり回されて、シロエはアキバの現状を変えるべく書類の中に埋もれて、直継は食材確保に奔走し、日に日に疲労を蓄積して行く。三日月同盟の面々も同様である。唯一元気そうなのはにやん太と美少女2人を弄り倒して気力を補給しているヘンリエッタ位のものだ。

しかし、其処に居るべき筈の青年の姿は見当たらない。

ハサン・サツバーハは、こういつた時誰よりも気を遣いまくつて奔走するのが常である。しかし今の所その姿を誰一人見ていない。理由も一部を除き、誰も知らない。知っている者も誰にも明かしていない。

### 『少し、行く所がある』

彼はそれだけ一部の者に告げてセララ救助隊を途中離脱した。その意味を理解できた者はいない。しかし彼の真剣な表情に、ただならぬものを感じたのか、誰も詳しく問い合わせめるような事はしなかつた。

「主君……」

みんなが寝静まる中、ギルドホールを抜け出したアカツキは月を見ながら自身の主君の名をつぶやく。風が吹き、彼女の纏めている黒髪が音を立てて揺れる。昼間の謙遜は静まり返り、すっかり闇に落ちたアキバには自分以外誰もいないのではないかという不安感と恐怖が影を落とす。いけないとthoughtてももう遅い、その影は大きさを増していき手が勝手に肩へと向かう。触れた肩は震えていた。

（弱くなつてしまつたな……）

昔は一人で居ても苦ではなかつた。時々むなしさこそ湧いてきても寂しさや悲しさ

を感じることはなかつた。でも今では人といふことに慣れてしまつた。それを彼女は弱くなつたと表現する。

毎日ヘンリエッタに着せ替え人形にされたり、三日月同盟のメンバーに話しかけられたり。少し絡みが面倒だと感じたりもするが、嫌いではないと感じている。みんな自分の事を年齢相応に扱ってくれる（ヘンリエッタ以外）。年下の子は敬語を使うし同世代なら碎けた口調で話してくれる。メンバーに極度に堅苦しい人物がいないのも彼女の軟化を進めた要因だ。

しかし彼女の心はどこか満たされない。ハサンの傍というポジションに自分が居ないことで誰かに取られてしまうのではないかという不安を覚えてしまう。

「何してますか？」

「…………!?」

アカツキは突然の問いに驚き、勢いよく後ろを振り返る。其処には見覚えのある金髪のアホ毛を揺らすヒロインXが立つていて。後ろに背負つた二刀の聖剣が月明かりを受けて淡い光を放つており彼女の背後だけやたらと明るく見えるが、今のアカツキにそんなことを考えている余裕などない。彼女は非常に観察力が優れており、勘も鋭い。

「どうせ、あの人の事でも考えていたんでしょう？」

「うつ…………」

あつさり見抜かれ顔を顰めるアカツキ。その表情から「わかっているなら口にしなくていい」と言いたげなのがだれにでも分かる。

「……あの人は昔つから何にも変わらないんです」

ヒロインXはアカツキの前に出て、被つていた帽子を脱ぐ。その際に髪を縛つていたゴムを取り外し髪を大きく散らばらせた。月明かりを反射する金色の髪、碧く輝く瞳。その全てがアカツキの視線を、そして意識を惹きつける。

「何かあつたら飛び出していつて、ボロボロになつて帰つてくる。酷い時には病院に担ぎ込まれる事もあつて、それでも私達には理由すら教えてくれない」  
髪を手櫛で梳きながら、クスリと笑つて言葉を続ける。

「先生やご両親に聞いたら、ある時は不良達に絡まれてた特に関わりのない人を助けてたり、ある時は他人が川に落とした物を探してあげてた時もありました」

彼女は見惚れるような立ち振る舞いでアカツキの方に振り返りまだまだ話を続けた。  
「私もハサンさんに救われた事があるんです。それも、今までいた世界が一変する様な」  
其処から話し始めたのは彼女が彼に出会うきっかけとなつた出来事。

「私は英國の父と日本人の母から生まれたハーフで、容姿も母似で良く男性に好かれたんです。でもそれが鼻についたのか、気の強い女子達にこつびどく虐められてて

少しだけ、ヒロインXの顔に影が差す。それでも彼女の声は悲しみで歪まない。

「男子達も関わり合いになりたくなかつたのか離れていつて、私は一人ぼっちでした。でも、ある日あの人があの手を差し伸べてくれたんです」

『大丈夫……な訳ないよな。ほら、手を出して』

「その後、彼は私に色々な物をくれました。馬鹿な事を言い合える友人、私の居場所、平和な学校生活。とてもじやありませんが、一生返せる気がしません」

涙がホロリと零れ落ち、彼女の頬に一筋の痕を残す。それだけ彼女にとつて、大切な事なのだろうと、アカツキは理解し頷く。

「私も主君には色々と救われた。この体の事もそうだが、今こうしてここに居るのも主君が手を差し伸べてくれたからだ」

「…………」

何故かアカツキの発言に黙り込むヒロインX。その目は嗚呼やつぱり、かという現実をまざまざと見せつけられた時の絶望感に近いものが込められていた。

「やつぱり、そうですよね……」

「？」

「面白目ムードから一変、髪を縛り直し帽子を被つたヒロインXは大きな溜息を吐きながらそう呟く。その反応に意味が分からないと首を傾げるアカツキ。

「少しくらい、『一目惚れだつた』とか『前から気になつてた』とか……。恋愛感情とかあつてくれても良くないですか？いや、助けて貰つたので文句はありませんが、なんていうかこう…………」

「はつ、はあ…………」

「それにあの人はお礼をいつも断るんです！折角用意したお礼の品物も代金押し付けて実質買いあげた様なものでしたし！言葉でお礼を言つても『別に気にするな』とか『自己満足でやつただけだ』とかを素で言うんですよ！照れたりとか笑つたりとかもせずにさも当然の様に！」

すっかりいつものテンションに戻つたヒロインX。彼女の帽子とボニテは人格切り替えのレバーか何かではないだろうかと言う疑問がアカツキの脳内を掠めた。

ただ言える事は、狙っている者は相当数いるという事だけである。

# 12殺目

??????

其処は瑞々しい命の営みなき悲しき深淵の地。そこでは多くの魔獸が跋扈し、地上では見られないような多くの異形が落ちてきた生者を喰らわんと牙や爪を研ぎ澄ます。

何もかものスケールが地上と異なる冥府の地、底なしの闇から生え出るように形成された石の道を一人の人が歩いていく。骸の兵ではない、瑞々しい肉と濁りない血液の流れる生人。死の空氣満ちる地に居るわけのない者が歩いている。それが何を意味するのか、ここまで話せば分からぬ者はいない。すぐにでも異形たちが集まつてきてその手足をもぎ取り、武器防具をかみ砕き、血をすすり、そこに人がいた痕跡一つ残らなくなる。ここはそんな世界なのだ。

しかし、誰も彼に近寄らない。冥界の空を飛ぶ異形たちは彼のいる方向を意図的に避け、地を行く魔獸は彼がいる通りを意図的に避け、彼が近づくのを感じるとすぐに逆戻りし別の通りへ移る。生者一人、本来誰か一体だけで十分相手どれるくらいの存在のはずなのだ。はずなのに異形たちは近づこうとすらしない。

ギヤアアアアア!!

しかし一体の魔獸が生者に向かって走っていく。どうやら体格差を利用してひき殺すつもりらしい。

「」

生者が何かを口にする。そして取り出された剣は漆黒の闇を纏い、本来の形からより鋭利な形状を成す。しかしそれを構えるわけではなく、ただゆつくりと魔獸が寄つてくるのを待つてゐる。

何かがおかしい、魔獸は野性的な本能でそう理解する。でも既に足は止まることを知らず、生者を蹴り殺す寸前という所。既に、遅い。

斬つ!!!

生者は一ミリとして剣を振つていない。しかし、魔獸は頭の天辺からしつぽの先までが裂けるように真つ二つに割れる。先ほどまでうるさく響いていた足音は消え、再び静寂と死臭が戻り始める中、生者は剣を懐へ戻し再び歩き始める。崩れ始める魔獸の体には目もくれず、零れ落ちる冥界のリア素材に目もくれず。

生者は冥界名物裁きの門をくぐる。ゲーム時代ではこの門をプレイヤーがくぐると特定のデバフが冥界のいる間永続的に付与されていた。それはこの世界でも同じである。

カツ！

門が輝きを放ち、デバフ効果の雷に向かって生者に降り注ぐ。

キヤハハハ!!

何者かの高笑いが聞こえると雷は軌道を変えてその高笑いをあげたものに向かつて降り注ぐ。生者は決してその方向を見ようともせず、足を止めようともしない。ただその存在に向かつて感謝の気持ちだけ抱き、前へと進み続ける。

とうとう石の道は途絶る。それ以上進めない、普通なら其処で諦める。でもその生者は諦めない。道がなければ作ればいい、それを実行しようと考える。

生者が何かを口にするとどこからともなく黒い影が途切れた場所から伸びていき、道を作る。それは冥界の果ての伸びているかの如くその終わりを確認することはできな

い。しかし生者は気を落とすことなく影の道を歩き始めた。

そして、その影の道は何かわからない黒い靄に遮られるように止まっていた。それはゲームでいう『現段階で踏み込めない領域』であり、マップの限界域を意味する。それを乗り越える手段はバグ以外に存在しない。

しかしその領域に、生者は手を突っ込む。そして、あろうことかその中に飛び込んだ。何があるかもわからぬその先へ、彼は踏み入れたのだ。どうなつてしまふかも分からぬにもかかわらず、生者は躊躇なく足を進める。途中で体が歪むような不快感、手足の感覚が一瞬消えかかるなどの違和感があつたものの、彼は一切歩みを止めない。平然とした表情で歩き続ける。そしてその漆黒の靄は少しづつ白くなり、ついには薄くなり生者を新たな空間へと誘う。

「……」

「……」  
生者の行きついた先は霊園。ふわふわと空間に白い何かが飛び回り、彼方此方に頭蓋が転がり、苔の生えた墓場が其処に広がっていた。  
「ん？」

その中でも一際大きい石の墓。其処に近づいた生者は表面についたほこりや汚れを払う。すると彫り込まれた文字が浮かび上がり、其処には何か文字が刻まれていた。

それが何なのか生者には分からぬ。石表面が削られたかのようにボロボロで全く読めない。でも、大切な何かであることなのは確かだと彼はその石面に触れる。

ー待たれよ、生きる者よー

彼の背後から話しかけるものがいた。足は消えかかり、体は透けている。顔も見えない。

ーいや、今はもう生きる者ではないなー

男の幽霊は何かを理解したような表情になる。対して生者はその言葉に小さく呟いた。

「サブ職業、死神」

彼は自分のサブ職業を改めて確認するように口にする。それが、今の現状をそのまま意味していると理解した上で。

ー貴様はこの世界に来た事で死神となつたのだー

「料理人がうまい料理を作れるのも、筆写師が書類を上手く写せるのも、追跡者がスニーカスキルを使えるのも、冒険者がその職に適した存在になるから、という事だろ?」

「そういう事だー」

もしも、剣聖という称号系サブ職業を獲得しているプレイヤーがいるとする。剣の扱いに優れた存在、それは唯の冒険者の肉体では称号持ちとしてそぐわない。だから世界がそのプレイヤーの肉体を剣聖としての肉体に書き換える。それはサブ職業・死神でも同じなのだ。

「しかし、死神は死を司る神。神になる事はただの冒険者には不可能。なれども死靈が精々だー」

しかし、男の幽霊は首を振り続きを口にする。

「お前は、神になる条件を満たしているー」

「常人では生き抜けない1世紀近い年月、膨大な生命・精神エネルギー、そして多くの者からの崇拜による神格化ー」

「貴様が生きてきた数十年の月日が、ここに身を結んだのだー」

男の幽霊はそう語るが、生者からすれば少しばかり急な話である。少なくとも彼は1世紀近い月日を生きている努力も、膨大な生命・精神エネルギーを得る努力も、多くの者に崇拜されるような努力も、何一つしていない。納得いかない点も多くあるが、納得

が行く点はいくつかある。

パルムの深き場所で地底湖に落下した時、生者、ハサン・サツバーは間違いなく死に掛けた。その時に彼の肉体と魂は一度別れかけた。彼は藻搔いた。なんとかして助かりたいと手を伸ばした。その時から、ハサンは本来存在しない力を掴み取っていた。死の予感を見る目、第七感・死視感。それは本来霧ヶ峰要の持つている異能である。

－貴様の魂は誰とも異なる異質なものだ－

ハサンは死にものぐるいで手を伸ばし、本来繋がりのない要としての精神基盤を掴み、それを在ろう事かハサンとしての精神基盤へ強引にひきづり込んだ。2つの精神基盤は交わり融合し、1つの大きな基盤となつた。それが膨大な生命・精神エネルギーの根源となつているのだとハサンは予測する。

一気をつける事だ。貴様のそれは冒険者の物でも、ましてや人の物でもない。成り立てといえど神の力の一端だ－

「ああ」

－それからこの地、そして冥界の空気は貴様にとつて新鮮な空気同様のものだが、余り留まることの無いようにな。慣れすぎると今度は戻れなくなる－

そう言い、男の幽霊は姿を消した。これ以上は言わせるなよ、とでも言いたげな厳つ

い顔で何処かへと消えていった。